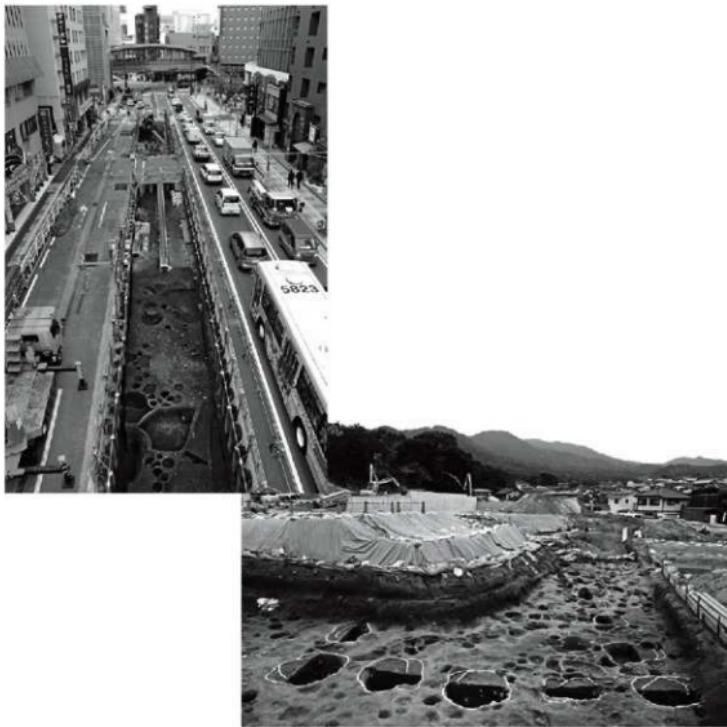


福岡市埋蔵文化財年報 VOL.29

—平成26(2014)年度版—



2015

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成24年度より教育委員会から市長部局の経済観光文化局へと移り、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含め多岐にわたる文化財保護業務に取り組んでおります。

本書は、平成26年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する緊急調査件数は、平成17年以降減少をつづけてきましたが、25年度より微増しています。発掘調査一件あたりの規模は、民間、公共とも、小規模開発の増加傾向が続いている。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料としても活用いただければ幸いです。

平成27年12月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財審査課、埋蔵文化財調査課、文化財保護課、大規模史跡整備推進課が平成26年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある26年度調査のうち、調査番号1404, 1407, 1416, 1423, 1425, 1433, 1437, 1440, 1451は、この年報をもって本報告とする。その他、本年度別途、本報告書が刊行されている調査については調査概要を割愛している。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財保護課（水野哲雄）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は佐藤一郎が担当した。

表紙写真：博多遺跡群第203次調査風景とクエゾノ遺跡第4次調査で検出された大型建物跡

目 次

- I 平成26年度文化財部の組織と分掌事務 2
- II 開発事前審査 3
- III 発掘調査 5
- IV 公開活動 5
- V 平成26年度発掘調査概要および報告 6
- VI 平成26年度新指定文化財 55

報告書抄録

I 平成26年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部

51

文化財部の組織と分掌事務

文化財保護課 10

- 運用係（事3、文1）
- 整備活用係（事1、文2）
- 文化財調査普及係（文1、学1）

部の総括、文化財施設の管理
史跡の保存・整備・活用、文化財関係団体との連絡調整
文化財保護審議会、文化財の調査、普及事業

大規模史跡整備推進課 5

- 福岡城跡整備係（事1、文2）
- 鴻臚館跡整備係（文1）

福岡城跡の調査・整備、課の庶務
鴻臚館跡の調査・整備

埋蔵文化財審査課 11

- 事前審査係（文4）
- 主査（文2）
- 主任文化財主事（文1）
- 管理係（事3）

公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
空港協議等担当
埋蔵文化財審査課・埋蔵文化財調査課の予算・決算、経理、課の庶務

埋蔵文化財調査課 22

- 調査第1係（文5）
- 主任文化財主事（文4）
- 調査第2係（文5）
- 主任文化財主事（文3）
- 主査（文1）

課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
今宿古墳群保存担当

埋蔵文化財センター 7

- 運営係（文2事2）
- 保存分析係（文2）

施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
埋蔵文化財の保存・分析

事：事務職 文：文化財専門職 学：文化芸能

埋蔵文化財審査課、調査課の職員構成（審査課管理係は事務職。他は文化財専門職）

◇ 埋蔵文化財審査課長	米倉秀紀	◇ 埋蔵文化財調査課長	常松幹雄
管理係長	内山広司	調査第1係長	吉武学
係員	横田忍、川村啓子	主任文化財主事	瀧本正志 加藤良彦 屋山洋
事前審査係長	佐藤一郎	係員	久住猛雄 大森真衣子 中尾祐太
係員	板倉有大 比嘉えりか 福園美由紀	埋蔵文化財専門員	小林義彦 山崎龍雄
主任文化財主事	池田祐司	埋蔵文化財調査員	井澤洋一 佐々木蘭貞
主査（空港協議等担当）	井上繭子	調査第2係長	榎本義嗣
係員	松尾奈緒子	主任文化財主事	荒牧宏行 大塚紀宜 星野恵美
		係員	清金良太 吉田大輔 服部瑞輝
			細石朋希 松村道博
		主査（今宿古墳群担当）	杉山富雄
		総務課付（陸前高田市派遣）	加藤隆也

II 開発事前審査

1. 概 要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めており、また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成24年8月よりは本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2. 平成26年度の事前審査

平成26年度の事前審査件数は、表1のとおりである。平成19年からの増加傾向で、7年間で810件弱・43%増加している。平成22年からは高止まり状態であったが、平成26年度は減少に転じている。

申請内容 公共事業に伴う依頼290件（平成25年度より公共汚水井は個別に申請）の内訳は表3のとおりである。事業者別では、国機関14件（5%）、福岡県1件（0.3%）、福岡市269件（93%）、その他6件（2%）で、福岡県以外は前年度と同じ比率である。事業別に見ると水道・電気等213件（73%）、道路22件（8%）、住宅を含めた建物14件（5%）、学校関係12件（4%）、公園5件（2%）、空港関係3件（1%）である。公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は14件（5%）であった。なお事業照会件数は984件で、昨年度より238件19%減である。事業別の内訳は、上下水道749件（76%）、学校69件（7%）、道路は56件（6%）、公園50件（5%）、住宅を含めた建物32件（3%）、空港15件（2%）であった。

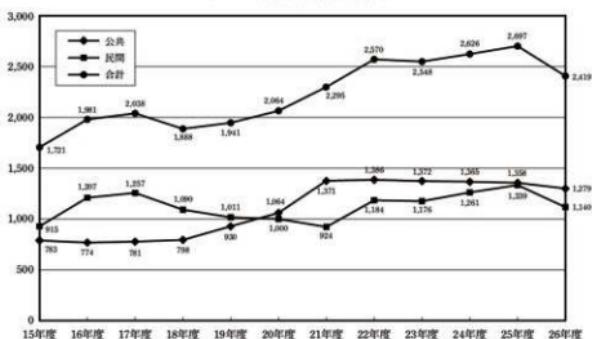
民間事業1,140件の照会内容は、事業別では個人住宅375件（33%）、戸建住宅120件（11%）、共同住宅203件（18%）、宅地造成46件（4%）、個人住宅兼工場または店舗6件（5%）など住宅関連事業をあわせると750件（66%）で前年・前々年度と同じ比率である。個人住宅は昨年から25件、6%減である。前年度の消費税増に伴うかけ込み需要の反動であろう。住宅以外の事業としては、工場5件（0.4%）、その他の建物（事務所、病院、寺社、倉庫等）76件（7%）、その他の開発（青空駐車場、資材置き場、運動競技場等）20件（2%）である。店舗は43件（4%）で、前年・前々年度とほぼ同じである。土地売買に伴う審査依頼は69件（6%）で、前年度よりも微増している。区画整理計画地の事前の調査依頼は3件である。

公共と民間の申請の合計を区別に見ると博多区382件（30%）、早良区259件（20%）、南区189件（15%）と前年度と順位は変わらないが、博多区が占める比率が高くなっている。博多区で14件4%増、中央区で±0%の他は、早良区83件24%減、西区66件29%減、南区44件19%減、東区23件16%減、城南区21件14%減と、いずれも減少している。

表1 平成15～26年度事前審査件数推移

事業	内 訳	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
公共	事業照会審査件数	671	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220	989
	申請件数	135	112	113	133	161	202	228	195	191	184	135	290
	審査件数計	806	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,335	1,279
民間	窓口照会件数	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491	12,301
	FAX照会件数	524	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,170	7,999	8,648
	照会件数計	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365	14,490	20,949
	申請（審査）件数	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	1,140
公・民審査件数計	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,697	2,419	

表2 事前審査件数推移表



指導内容 公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,387件で、前年より279件減少している。総括的に見ると書類審査での回答1,137件(82%)、以下踏査10件(0.7%)、試掘247件(18%)である。審査結果は開発同意146件(11%)、慎重工事1,036件(85%)、工事立会137件(10%)、発掘調査52件(4%)、要協議(設計未定、売却予定で遺跡ありなど)8件(0.6%)で、比率は前年度と大きくは変わらない。

試掘調査・確認調査 包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査(以下試掘調査と総称する)は東区29件、博多区114件、中央区5件、南区39件、城南区18件、早良区60件、西区53件、総計318件で、遺跡数は109遺跡である。10件以上試掘した遺跡としては箱崎遺跡12件、那珂遺跡群16件、雀居遺跡10件、有田遺跡群24件、遺跡隣接地での試掘調査は29件であった。試掘件数は昨年度に比べ28%減であった。東区19%、博多区10%、南区44%、城南区53%、早良区41%、西区20%減、中央区はほぼ同数であった。

表3 平成26年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別(書類審査・現地踏査・試掘調査)でみた判断指示の結果												区別審査件数							
		開発同意			慎重工事			工事立会			発掘調査			協議			審査	取り			
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	継続	下げ	公	民	計
東	公共	1	1	1														5		122	
	民間	17	1	2	64			18	2	1	1	2						3		117	
博多	公共	5			55				11								2	3	1	79	382
	民間	16	2	14	153	1	43	20			12	2		16	1		3	17	3	303	
中央	公共	1		1														1	4		27
	民間	2	1		13			2	2									1		23	
南	公共	3		2	4														9		189
	民間	14		5	118	2	15	12			4	2		4				4		180	
城南	公共	1																	1		134
	民間	10			100			15	6									2		133	
早良	公共	3			11			1	1			1						1		18	
	民間	14		3	155			28	14		5	1	1	9			3	8		241	
西	公共	5			7			2	1		1		1	2				1		20	
	民間	19		3	87			21	3		1	1						5	2	143	
小計	公共	19		4	81			3	13		1	1	1	4			2	6	1	139	
	民間	92	4	27	691	3	142	59	1	23	10	1	35	1			6	40	5	1,140	
公共污水耕(空)					130				40									1		171	
合計		111	4	31	902	3	145	112	1	24	11	2	39	1	0	8	46	7	1,423		

(※) 道路下水道局の公共污水耕は複数案件が一括提出されるため、総件数と、審査結果の内訳のみを示す。

窓口等照会 民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は12,301件、ファックスでの照会は8,648件、あわせて20,949件で、前年度より6,465件の増加である。平成24年8月より本市ホームページにて、包蔵地外町名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は一時的に減少したものの、再び増加している。ファックス照会件数は22年度以降毎年1,000件前後増加しているが、26年度は約650件増であった。包蔵地内1,732件(20%)、包蔵地隣接地内519件(6%)、包蔵地外6,397件(74%)で、この比率はこの6年間ほとんど変わっていない。区別の内訳は博多区1,611件(19%)、南区1,558件(18%)、中央区1,491件(17%)、東区1,320件(15%)、早良区1,038件(12%)、西区851件(10%)、城南区779件(9%)であった。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

本市では、試掘調査や発掘調査などの成果にもとづき、より正確な埋蔵文化財包蔵地範囲の実情に近づけるため、また、事前審査業務の効率を図るために、包蔵地・隣接地の改訂作業を随時実施しており、平成26年度は35件、62遺跡で実施した。遺跡の範囲拡大は5件、縮小は1件あり、26件で隣接地の解除を行った。また、平成26年度には1遺跡の新規登録、1遺跡の名称変更を行った。

III 発掘調査

1. 平成26年度の発掘調査

26年度の発掘調査件数は、表7に示したように、25年度からの継続事業5件、26年度新規事業51件の計56件で、このうち7件は平成27年度に継続である。文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査は49件、史跡整備に伴う調査は2件(1222, 1439)である。

56件の発掘調査総面積は17,782m²で、前年度に比べ件数は9件増加したが、調査面積は25%減少した。(表6・7)。公民別では公共事業が1,996m²、民間事業が15,786m²であり、民間が89%を占めた。公共事業総面積は前年度より40%減、民間事業も22%減である(平成24年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業としている)。今年度も前年度に引き続き土地区画整理や圃場整備事業に伴う調査は行っていない。

個々の発掘調査の面積は、100m²以下が18件、101～300m²が21件、301～500m²が8件、501～1,000m²が5件、1,001m²～10,000m²が4件で、10,001m²以上の調査はなかった。300m²以下の小規模調査は39件(70%)と、前年度の25件(53%)から件数・比率とも増加、一方で1,000m²以上の調査は4件で、前年度より比率を11%から7%に減じている。1件あたりの平均調査面積は320m²、民間事業では318m²、公共事業で414m²である。区ごとでは(表7)東区3件、博多区30件、中央区3件、南区6件、城南区1件、早良区8件、西区5件で、博多区で11件増加している。面積では、東区372m²、博多区9,592m²、中央1,319m²、南区2,013m²、城南区77m²、早良区1,342m²、西区3,067m²である。博多区で約3,300m²増に対し、西区では約9,600m²減と前々年度に引き続き大幅に減少している。伊都地区土地区画整理事業に伴う調査終了に引き続き、九州大学伊都キャンパス建設事業に伴う調査が終息に向かっていることによる。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数遺構面調査のため、実際の発掘面積は増加する。

IV 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成26年度は博多区住吉神社遺跡第3次調査で地元向けに9月21日に現地説明会を実施し、110人の見学者が訪れた。また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成26年度は、福岡市立那珂中学校・高取中学校・城西中学校3校の生徒を対象に市内の発掘現場及び整理室において、職場体験学習を行った。

公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表8のとおり計28冊を刊行した。

V 平成25年度発掘調査概要および報告

調査概要・報告は表7の調査番号順に掲載し、位置番号は下ページの地図に一致する。また、各報文の図〔1. 調査地点の位置〕の()内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

表4 発掘調査件数の推移()前年度からの継続件数

事業	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
民間	38(4)	21(6)	30(0)	27(1)	22(2)	42(4)	50(5)
圃場整備	0(0)	4(0)	4(2)	1(3)	0(0)	0(0)	0(0)
公共	29(4)	16(3)	16(3)	23(3)	19(2)	5(1)	6(1)
合計	67(8)	50(9)	50(5)	51(7)	41(4)	47(4)	56(6)

表5 発掘調査面積の推移(m²)

事業	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
民間	17,651	11,190	15,649	6,175	15,333	20,293	15,786
圃場整備	0	0	9,774	1,984	0	0	0
公共	48,729	33,099	22,856	15,322	14,440	3,315	1,996
合計	66,380	44,289	48,279	23,481	29,773	23,608	17,782

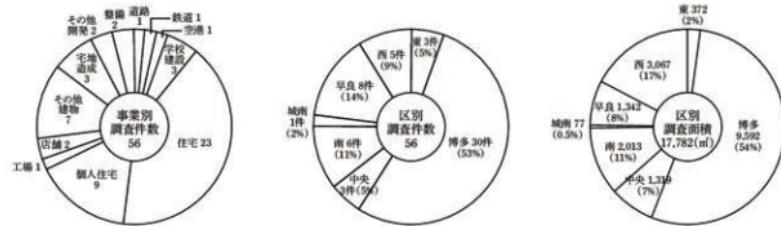


表6 発掘調査内訳



1. 有田遺跡群
2. 版氏B遺跡
3. 井尻A遺跡
4. 井相田C遺跡
5. 板付遺跡
6. 白石環城跡
7. 大野E遺跡
8. 影原A遺跡
9. クソノJ遺跡
10. 番所B遺跡
11. 家原遺跡
12. 雑賀原遺跡
13. 山口遺跡
14. 住吉神社遺跡
15. 高橋遺跡
16. 田舎A遺跡
17. 那須毛遺跡群
18. 野多目C遺跡
19. 博多遺跡群
20. 長崎遺跡
21. 原遺跡
22. 比恵原遺跡群
23. 福岡城跡
24. 福岡城下町遺跡
25. 麻野A遺跡
26. 元南・桑原遺跡群
27. 錦岡B遺跡
28. 佐木原遺跡
29. 吉原遺跡
30. 吉原尻町遺跡

平成26年度発掘調査地位置図

表8 平成25年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	取扱調査番号
1249	有田・小田原 55 有田遺跡群第18次、第248次調査報告	7913・1305	
1250	有田・小田原 56 有田遺跡群第29次調査の報告	1317	
1251	井尻 B 25 第25次、第32次調査の報告	0613・0849	
1252	井尻 B 26 井尻 B 遺跡第4次調査の報告	1322	
1253	井相田 C 遺跡 10 井相田 C 遺跡第11・12次調査報告	1310・1343	
1254	今山遺跡 第6次調査 重要遺跡確認調査報告	8409	
1255	大塚遺跡 8 第18次調査報告	1117	
1256	岸田遺跡 1 岸田遺跡 1 区の報告	0930	
1257	岸田遺跡 2 第1次調査 2～5区の報告	0930	
1258	熊本遺跡 3 第3次調査報告	1319	
1259	那珂 70 那珂遺跡群第38次調査報告	9228	
1260	那珂 71 第142次調査報告	1232	
1261	那珂 72 那珂遺跡群第145次調査報告	1312	
1262	那珂 73 第147次調査の報告	1330	
1263	那珂 76 第16次調査報告	1336	
1264	野田遺跡 5 野田 B 遺跡 3	野田 B 遺跡第4次調査報告	0767
1265	洋原古墳 東京人間環境整備重臣遺跡群第2次調査報告	8801	
1266	博多 148 博多遺跡群第194次調査報告	1223	
1267	博多 149 博多遺跡群第195次調査報告	1304	
1268	博多 150 博多遺跡群第196次調査報告	1313	
1269	博多 151 博多遺跡群第197次調査報告	1322	
1270	博多 152 博多遺跡群第198次調査報告	1324	
1271	箱崎 48 箱崎遺跡第69次調査報告	1316	
1272	比恵 68 比恵遺跡第127次・129次調査報告	1301・1321	
1273	比恵 69 比恵遺跡第128次調査報告	1302	
1274	女原遺跡 6 第2次調査報告書	8626	
1275	元園・桑原遺跡群 24 第42次調査の報告 3・第61次調査の報告	0451・1315	
1276	元園・桑原遺跡群 25 第42次調査の報告 (4)	0451	
福岡市埋蔵文化財年報 VOL.28		平成25(2013)年度版	141-147-161- 162-145-161- 167-140-161

概要

1405 箱崎遺跡第70次調査 (HKZ-70)

所在地 東区箱崎1丁目2045番5,2045番6 調査面積 116m²
 調査原因 共同住宅 担当者 荒牧宏行
 調査期間 2014.4.14～6.13 処置 記録保存

位置と環境 箱崎遺跡の北東部に位置する。宮崎宮から北側に延びた砂丘列の頂部近くに位置する。地山の明黄色砂の標高は3.2m前後で、その上層に厚さ50cm以上の整地層が堆積している。

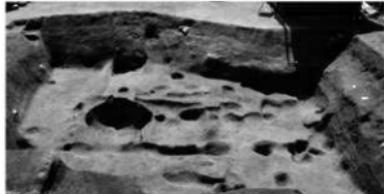
検出遺構 整地層中から13世紀代の土師皿集中遺構、石組みの方形枠、根石を据えた柱穴からなる掘立柱建物跡、井戸2基、最も上面からの粘土を貼った水路等が検出された。これらは現在の町筋とほぼ同じである。最下の整地層、地山からは柱穴や土壤が検出されたが、主軸方向が上層と異なる可能性がある。

出土遺物 土師器、陶磁器類がコンテナ(60×40×15cm程度の箱)に27箱分出土した。出土遺物中に皇朝十二銭の乾元大寶(初鑄958年)がある。

まとめ 12、13世紀代を中心とした中世町屋(都市)遺構が検出された。整地層の遺存が良く、中世後半期とみられる遺構も上層から検出された。これらは現代の町筋とほぼ同じ主軸方向をとるが、下層では異なった方向の掘立柱建物跡も検出されたことから町筋が改変された可能性がある。また、皇朝十二銭の出土は宮崎宮を中心に国内でも有数の経済、文化が発展していた都市といえる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 1:8000)



2. 調査区全貌 (南から)



3. 石組み枠 (南から)

1408 住吉神社遺跡第3次調査 (SYJ-3)

所在地	博多区住吉2丁目49-1, 49-2	調査面積	1317.4 m ²
調査原因	店舗	担当者	瀧本正志
調査期間	2014.5.19 ~ 9.24	処置	記録保存

位置と環境 調査地は、那珂川の堆積作用で形成された標高3mを測る沖積地で、住吉神社の北西150mに位置する駐車場跡地である。鎌倉時代に住吉神社へ奉納とされる古絵図では、当地は湾入部奥の東岸に位置する。中世からの海外交易拠点都市「博多」と近接しているが、地形的には御笠川(比恵川)で画された状態であった。これまで、古代に創建された住吉神社とその周辺地域の歴史的状況は不明のままであった。

検出遺構 遺構は、地表下0.8~1mの黄褐色砂質土層面で中世~近世の屋敷に関連する掘立柱建物、井戸、溝、柱穴、小穴などを検出した。掘立柱建物は桟筋が溝と並行するものが大半で、柱穴には建物の沈下や揺らぎを防ぐための板石や詰石の措置がなされている。

出土遺物 遺物は、主に10世紀後半~17世紀の土師器、施釉陶器、焼締陶器、須恵器、磁器、石製品等が出土し、総量コンテナ198箱を数える。内容的には日用雑器の皿、碗、鉢、土鍋、甕、石鍋、石臼と信感財の輸入陶磁器である青磁、白磁、施釉陶器に大別される。

まとめ 今回の調査により、住吉神社境内を中心とする埋蔵文化財包蔵地(住吉神社遺跡)においては、中世の博多に勝るとも劣らない状況と歴史的変遷を内包していることが判明した。さらに、博多遺跡との特異点である供献や祭祀に結びつく出土遺物の多さから、住吉神社に深く関係した人々の屋敷地であった可能性が高いと判断される。この状況は、嗽碗などの有田焼の出土から特異階層が近世に至るまで連續として続いていることを示すもので、学術的価値の高い成果を得ることができた。

調査報告書は2016年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 2820 1:8000)



2. 第1調査区全景 (東から)



3. 土壌遺物出土状況 (東から)

1413 元岡・桑原遺跡群第65次調査 (MOT-65)

所在地 西区大字元岡地内

調査面積 2451.2 m²

調査原因 学校建設

担当者 大森真衣子・清金良太

調査期間 2014.6.2 ~ 12.26

処置 記録保存

位置と環境 元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端に位置し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵は小河川によって樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込み、遺跡は丘陵上や枝分かれした谷部に立地する。遺跡の立地する糸島半島の基部付近は近世以前、東側の今津湾と西側の加布里湾から渦状に入り組み、志摩町泊地区から糸島市志登地区にかけて陸橋状に繋がっていたと想定されている。



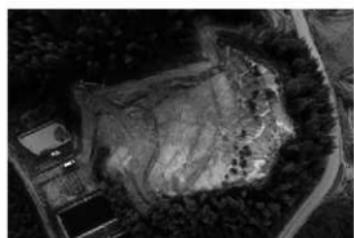
1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)

検出構構

出土遺物 第65次調査は基本的には包含層の調査であった。弥生時代初め～古代にかけての土器がまばらに検出された。また、下部では鉄器が見つかっており、サルボではないかと思われる。その他焼土坑が3基確認されている。層位からいざれも古代のものである。



2. 調査区南半部全景 (東から)



3. 調査区北半部全景 (東から)

1414 田島A遺跡第8次調査 (TZA-8)

所在地 城南区田島1丁目376番1-377番1 調査面積 77 m²

調査原因 共同住宅 担当者 大森真衣子・服部瑞輝

調査期間 2014.6.9 ~ 7.23 処置 記録保存

位置と環境 油山から派生する丘陵先端東側、田島A遺跡の中央東端部に位置しており、東側には種井川が流れる。土壌はAso4噴出物である鳥栖ロームに覆われる。田島地区は戦前までは耕作地が多く、昭和30年代以降に一帯は住宅地として開発されているが、これまでの調査により弥生時代～中世の遺構、遺物が比較的良好な状態で確認されている。



1. 調査地点の位置 (62 小坂 199 1:8000)

検出構構

検出した遺構は、堅穴住居7軒、数基の柱穴およびピットである。基本層序は、表土下に遺物包含層、

ローム層の順で堆積する。遺構はローム上で検出した。GLから遺構検出面までの深さは調査区西側で約130cm、東側で約170cmを測る。住居跡はいずれも切合いが著しく、幾度も建て替えが行われたと考えられる。最も後出するSC003は約3.40m×4.50mを測る。長方形を呈し、東側中央を除いて周囲を壁溝が巡り、北半部に一部白色粘土が貼られた厚み15cm程度のベッド状遺構が設置されている。主柱穴は検出できなかつた。SC003に先行するSC001からは、炉跡とみられる焼土坑を検出した。調査区西側で検出したSC002は、周囲を壁溝が巡り、調査区外の西に広がると考えられる。またこの住居内で、短径30cm×長径80cm程度の焼土ブロックを一部検出した。

出土遺物 遺物は主に住居内からの出土である。器種は布留式甕が多いが、長頸の小壺、高杯、低脚高杯等も出土した。また、甕や鼓型器台をはじめとする山陰系の土器が出土している。遺物はいずれも古墳時代初頭から前期頃と考えられる。遺物はコンテナ約30箱分である。

まとめ 田島A遺跡第8次調査においては、古墳時代初頭から前期頃の竪穴住居跡7軒を検出した。うち6軒は調査区外に広がっており、集落の広がりを窺わせる。またSC003からは甕をはじめとする山陰系の土器が出土しており、当時の地域交流を示すうえで重要な資料となった。

1415 箱崎遺跡第71次調査 (HKZ-71)

所在地	東区箱崎1丁目2584-1・5の一部	調査面積	160m ²
調査原因	共同住宅	担当者	荒牧宏行
調査期間	2014.6.19～8.8	処置	記録保存

位置と環境 箱崎遺跡の北東部に位置する。宮崎宮から北側に延びた砂丘列の頂部近くに位置する。搅乱を受け大半が破壊・消滅しているが、部分的に残る地山の明黄色砂の標高は4.0m前後である。

検出遺構 中世から近世までの井戸、柱穴、土壙、溝等が検出された。特に10～11世紀代と考えられる梵鐘鋳造遺構が基底部の遺存が良好な状態で検出された。

出土遺物 土師器、陶磁器類がコンテナに30箱分出土した。梵鐘鋳造遺構からは梵鐘の龍頭、撞座などの鋳型が出土した。

まとめ 梵鐘鋳造遺構は10～11世紀代の宮崎宮創建から初期にかけての宮崎宮神宮寺との関連が考えられ極めて重要である。また、梵鐘の製作過程を考察するうえでも数少ない梵鐘鋳造遺構の1例として貴重な情報を得ることができた。



2. 調査区全景（東から）



3. SC003竪穴住居跡 (南東から)



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 1:8000)



2. 調査区全景（南から）



3. 梵鐘鋳造遺構

1418 有田遺跡群第255次調査 (ART-255)

所在 地 早良区小田部1丁目34番

調査面積 40.4 m²

調査原因 捩壁建設

担当 者 池田祐司・比嘉えりか

調査期間 2014.7.24

処 置 記録保存

位置と環境

今回の調査地は、八ツ手状に伸びる小田部台地の中央台地北端に位置する。調査地の標高は約6.5mを測り、南側から平坦に伸びる台地上にあるが、北側は崖を成し、その比高差は約3mを測る。

周辺では25・27・37・126次調査等が実施され、調査地西隣の126次調査では弥生時代の埴棺墓や木棺墓が確認された。遺構面は鳥栖ロームで、表土直下のG L -30cm前後と非常に浅い。

今回の工事計画では、敷地北面の崖下に駐車場を設置するため、既存のL字擁壁を敷地内側に5m移して再設置する計画であった。そのため、事前に試掘調査を実施したところ、G L -40～-50cmでピットが確認された。よって、擁壁工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

検出遺構

柱穴を数基確認したが、擾乱が著しく、遺構の残存状況は良好でない。掘立柱建物の復元には至らなかった。また、遺物は1点も出土しなかった。

まとめ

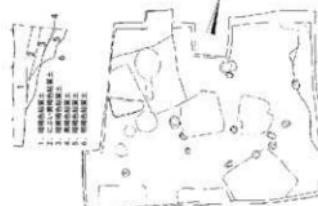
126次で確認された墓域は、今回の調査地には広がらないことが確認できた。また、周辺の調査成果では、今回の調査と同様に時期不明の柱穴群が広がっている。どのような性格をもつか、今後の調査結果に期待したい。



1. 調査地点の位置 (32, 原 309 1:8000)



2. 調査地点の詳細位置 (1:1000)



3. 遺構配図 (1:150)

1419 クエゾノ遺跡第4次調査 (KEZ-4)

所在地	早良区梅林7丁目40, 41, 46	調査面積	620.7 m ²
調査原因	宅地造成	担当者	久住猛雄
調査期間	2014.8.19 ~ 11.1	処置	記録保存

位置と環境 クエゾノ遺跡は福岡平野南西にある油山から派生する標高22 ~ 40mの丘陵上に位置する。調査地はその丘陵の南西部、油山川東岸に位置する。東側の丘陵尾根との間は急峻な斜面だが、西側は油山川に向かう緩斜面の地形である。



1. 調査地点の位置 (75 西油山 269 1:8000)



2. 第1面調査区全貌 (南東から)



3. 第2面調査区全貌 (南から)

検出遺構 西が高く東に低い斜面堆積があり場所によりレベル地表下150 ~ 200cmのにぶい灰褐色砂質土上面で遺構を検出した。第1面の検出遺構は飛鳥時代末~鎌倉時代の溝、土坑、石敷遺構、石組遺構、列石状遺構、柱穴多数、掘立柱建物を検出した。第1面基盤の砂質土には飛鳥時代の遺物が包含され整地層の可能性がある。この下部に遺物の多い黒褐~極暗褐色土包含層があり、包含層は斜面上方の調査区東端では薄いが、調査区のほぼ全面にあった。遺物は弥生~古墳時代であるが、下部は弥生時代中期である。「包含層」下半は、斜面堆積の上に遺構が濃密に重複したものである。包含層下部のにぶい黄褐色砂礫混入砂質土層上面で遺構を検出した(第2面)。第2面遺構の大部分は弥生時代中期~後期だが、古墳時代~飛鳥時代や縄文時代晚期もある。土坑、柱穴多数、掘立柱建物を検出した。特筆すべきは径100cm以上の大型柱穴が並ぶ4 × 8間、8.3m × 16.8mの超大型掘立柱建物であり、柱穴の精査から同じ場所での2度の建替痕跡を検出した。

出土遺物 縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶器、輸入陶磁器、円面鏡、縄文~弥生時代の石器などである。土器・

陶磁器が80箱、石器類2箱である。なお、第2面下部の砂礫混入砂質土には縄文時代の遺物の包含が認められた。

まとめ 今回の調査ではクエゾノ遺跡中枢部の一画を検出したとみられる。特に第2面の超大型建物は弥生時代中期末から後期初頭とみられるが、弥生時代で全国でも有数の規模である。この発見からクエゾノ遺跡は弥生時代中期~後期前半の拠点集落であった可能性が高くなかった。

1427 博多遺跡群第203次調査 (HKT-203)

所在地 博多区祇園町

調査面積 271m²

調査原因 地下鉄七隈線延伸

担当者 星野恵美・井上蘭子・大森真衣子・

調査期間 2014.9.8～継続中

細石朋希・服部瑞輝

処置 記録保存

位置と環境 博多遺跡群は、玄界灘に開口した博多湾のほぼ中央に面し、沖積世海進以降に堆積した砂州を基盤に、同湾岸に沿って長く形成された古砂丘上に立地する。今回の調査地点は最も内陸側の古砂丘の南西端に位置する。地下鉄中間駅は4車線の現道「博多駅前通り」の地下30m付近に長さ約180m、幅15～18mの規模で建設される。調査にあたっては、片側2車線の通行止めを行い、調査地点は11箇所に分断された。今年度は南側半分の1～6区の調査を行い、来年度引き続き北側半分の7～11区の調査を行う予定である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. 弥生時代壺棺墓検出状況 (上から)

検出遺構 調査区は東西に細長く、中央部付近の3区で最も標高が高く、3.8mを測る。東側の6区は標高3.0mを測り、砂丘は徐々に傾斜している。また、調査付近まで湾入があったと考えられる西側については、2区の東側から1区にかけて急激に砂丘面が落ちており、河川が入り込む様相を呈していた。遺構面は道路下90～100cmで第1面を設定し、概ね鎌倉～江戸時代にかけての遺構を検出した。その下、砂丘上面までは50～120cmほど包含層や埋立土が堆積し、その間に3～5面の遺構面を設定し、調査を行った。検出した遺構は弥生時代中期の壺棺墓5基、終末期の壺棺墓1基、終末期～古墳時代前期の堅穴式住居跡、奈良時代の土坑・柱穴、平安・鎌倉時代の井戸・大量の陶磁器等が廃棄された土坑・柱穴、江戸時代の井戸・柱穴等である。

出土遺物 出土した遺物は、最も古いもので縄文時代早期の異形石器、弥生土器、土師器、須恵器、中国・朝鮮半島の陶磁器、土製品、石器、石製品、青銅製品、銅錢、鉛製品、鉄製品、鉄滓、ガラス玉、人骨、獸骨等であり、コンテナ330箱分である。

調査報告書は平成29年度に刊行予定である。

1430 博多遺跡群第202次調査 (HKT-202)

所在地	博多区下川端158	調査面積	168m ²
調査原因	共同住宅	担当者	荒牧宏行
調査期間	2014.10.15 ~	処置	記録保存

位置と環境 博多遺跡群の北西部に位置する。砂丘で形成された博多遺跡群内の息の濱南端付近に位置する。最上部の検出面の標高は1.9m、埋め立て整地土下の灰白色砂層の流路を標高1.2mで確認できた。この砂層の上面は南側へ下降していく。

検出遺構 遺構の時期は14世紀からとみられ、15世紀以降に集中する。細かく積み上げた埋め立て土の下層には流水による埋土がみられ、12世紀以前の遺物を含む。遺構は根石を据えた柱穴や溝が検出され、町筋の方向が確認できた。また、細かく積み上げた埋土は道路面の可能性もあり、最下部近くに土師器が集中して埋置した行為は祭祀の可能性もある。

出土遺物 土師器、陶磁器などコンテナ17箱分が出土した。また、宋代の銅錢が多く出土し、銅錢を柱穴根石上に置いて地鎮の祭祀を行ったものが多い。

まとめ 博多遺跡群の息の濱南西部の開発状況を知ることができた。14世紀以降に開発、都市の形成が進行し、特に15世紀から埋め立てが本格化し、江戸時代になると大きく埋め立て改変されたと考えられる。また、溝や掘立柱建物の柱筋から町筋方向を知ることができた。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 調査北半全景 (北西から)



3. 溝と柱穴根石

1431 原遺跡第33次調査 (HAA-33)

所在地	早良区原6丁目667-2, 3, 4	調査面積	174.3m ²
調査原因	個人住宅	担当者	瀧本正志
調査期間	2014.11.4 ~ 12.15	処置	記録保存

位置と環境

調査地は、福岡市西部を占める早良平野の北東部、低位ローム層の基盤層上に展開する原遺跡の北東部に位置する宅地で、標高4.4mを測る。原遺跡は、北方が開口する馬蹄形状の微高地形を呈し、これまでに縄文時代最終末～弥生時代早期の集落遺構を検出している。遺跡の谷部においては縄文時代最終末～弥生時代早期、微高地においては弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺構・遺物が数多く確認されている。

検出遺構

地表下0.5～0.8mの明黄褐色ローム(明黄褐色粘質土)層上面で弥生時代中期の甕棺墓、中世の井戸、溝、柱穴、小穴などを検出した。

出土遺物

遺物は、主に弥生時代中期の弥生土器、11世紀～15世紀の土師器、瓦質土器、焼締陶器、須恵器、磁器、石製品等が各遺構から出土し、総量コントナ14箱を数える。内容的には日用雑器の皿、椀、鉢、土鍋、甕、石鍋と威信財の輸入陶磁器である青磁、白磁、施釉陶器に大別される。

まとめ

今回の調査により、本調査地を含む周辺地域においては、弥生時代中期・中世には集落が存在していたことが明らかとなった。その規模・構成や変遷については今後の周辺調査を待つ必要があるが、原地域の集落が遅くとも中世の早い段階から大規模に成立し、地域支配階層と直結した屋敷の存在を示す資料を得られたことは、今回の調査の大きな成果といえる。地権者の了解の下、掘削深度より深い遺構については完掘を行わずに現地保存した。

調査報告書は2016年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82 原 311 1:8000)



2. 第1調査区全景 (西から)



3. 甕棺墓SK29出土状況 (南から)

1434 井尻B遺跡第42次調査 (IGB-42)

所在地 南区井尻1丁目707番6

調査面積 66m²

調査原因 個人住宅

担当者 小林義彦

調査期間 2014.12.9～12.19

処置 記録保存

位置と環境

井尻B遺跡は、觀音山に発して春日市の須玖岡本遺跡から井尻、那珂、比恵遺跡群へと続く低丘陵上に立地し、2kmほど東には、諸岡遺跡や板付遺跡がある。第42次調査区は、この井尻B遺跡の中央部西縁に位置し、すぐ南東には井尻磨寺がある。

検出遺構

第42次調査では、弥生時代中期の竪穴住居1棟と梁間長が2.5m、桁行長が5mの大型建物1棟、古墳時代初めの竪穴住居1棟の外に柱穴を検出した。



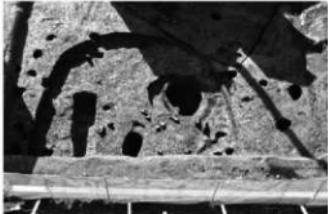
1. 調査地点の位置 (25 井尻 90 1:8000)

出土遺物 深穴住居や掘立柱建物から、弥生式土器（甕・器台）や土器器（甕・鉢）などの外に黒曜石片などがコンテナケースに3箱出土した。

まとめ 第42次調査区では、弥生時代中期後半の円形住居（1棟）とそれより古い掘立柱建物（1棟）の外に古墳時代初めの方形住居（1棟）を検出した。殊に、掘立柱建物の掘方は、一辺が100cmの方形プランを呈し、深さも50cmある大型のもので、円形住居に先行するものである。立地的には、井戸B遺跡中央部の西縁に位置し、すぐ西には、北から浅い開析谷が湾入している。本調査区周辺の第7・10・15次調査区でも同期の集落域が拡がっていることが明らかになった。また、規模は明らかでないが、該期の大型の掘立柱建物が検出されたことは、集落域内にあって何らかの重要な位置を占めていたことが想起される。



2. 調査区全景（北から）



3. 11号住居跡（北から）

1435 福岡城下町遺跡第1次調査 (FUM-1)

所在地 中央区赤坂1丁目174番地6筆

調査面積 1261m²

調査原因 共同住宅

担当者 山崎龍雄

調査期間 2014.12.15 ~ 2015.4.30

処置 記録保存

位置と環境 調査地は博多湾沿岸に展開する砂丘上に立地する。福岡城の北東、中堀にかかる赤坂門の北約100mの位置にある。一帯は福岡藩の大身の屋敷地で、この北側を唐津街道が通り、海側にかけては町屋になる。城下町造成時から19世紀初めの文化年間に火災で屋敷が焼けるまでは大身家の屋敷地（当初は久野氏、その後は斎藤氏）、その後は城内にあった郡役所が当地に移ってくる。

検出遺構 調査地は城下町造成時に福岡城がある丘陵の山土を持って来て整地している。調査は大きく3面の調査で、深さ1mほどで遺構を検出した。上から第1面は郡役所時代の遺構で、火災にあった整地面に役所の一部と思われる礎石建物や、瓦などを大量に廃棄した土坑を検出した。第2面は大身屋敷地で、礎石建物や廃棄土坑、庭園、瓦井戸などを検出。第3面は城下町造成時までで、造成時の当初の礎石建物、井戸、土坑、鎌倉から室町期の溝などを検出した。

出土遺物 造成土や廃棄土坑などから多量の瓦類、肥前陶磁器、福岡県の高取焼、中国宋から明にかけての青磁・白磁・



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 2889 1:8000)



2. 調査区全景（北から）

青花、鉄器、銅鏡などが430箱出土した。

まとめ 市街地での調査で、当初、遺構の残り具合が不安視されていたが、予想外に遺構の残りは良好であった。また城下町以前の中世の遺構も存在することが判明した。大身屋敷地は瓦が多量に出土していることから建物は瓦葺で、また美濃焼や高取焼きの茶陶が出土しており、福岡藩大身家臣の茶を嗜んだ風雅な暮らしの一部を垣間見ることが出来る。周辺一帯にはまだまだ城下町遺跡の遺構が残っているものと思われる。



3. I 区第1面群屋敷建物礎石検出状況（北から）

1436 弥永原遺跡第11次調査 (YNB-11)

所在地	南区上日佐3丁目123-1, 124, 1127-1	調査面積	1560m ²
調査原因	宅地造成	担当者	小林義彦
調査期間	2014.12.15 ~ 2015.8.17	処置	記録保存

位置と環境 福岡平野の西縁には、背振山系を源流とする那珂川が北流し、その右岸には、観音山の小山塊から派生する中位段丘が細長く延びている。段丘は幾つかの鞍部を形成しながら北へむかって延びる。弥永原遺跡は、この段丘の最も北に位置しており、その基部には下白水大塚古墳や日拝塚古墳などの前方後円墳がある。第11次調査区は、この弥永原遺跡の最北端にある。

検出遺構 第11次調査では、弥生時代前期後半から後期の集落跡と墳墓および古墳時代初めと後期の墳墓のほかに古代から中世の遺構を検出した。まず、弥生時代の集落遺構は前期後半の貯蔵穴13基と中期の竪穴住居4棟、後期の竪穴住居3棟のほかに溝と土壌を検出した。このうち、竪穴住居は中期のものが円形、後期のものが方形のプランを呈する。墳墓は、前期後半の土壌墓や木棺墓20基+αと前期末から中期初頭の甕棺墓13基がある。また、後期の石蓋土壌墓1基と並置する標石墓2基があり、石蓋土壌墓には鉄鎌1点が、標石墓には鉄斧や鉗・刀子・ガラス玉が副葬されていた。更に、古墳時代初めから前期には方形周溝墓2基と円墳2基がある。このうち42号墳は丘尾を切断した直径が10m余の円墳で主体部の木棺墓からは鉄劍先が出土した。

まとめ 全体として丘陵頂部に貯蔵穴群が、その北側斜面に墳墓域が、また丘陵の南側緩斜面に竪穴住居群が拡がる傾向が窺える。



1. 調査地点の位置 (26 上日佐 105 1:8000)



2. 発掘調査全景 (左が北)



3. 27号甕棺墓 (北から)

1438 野多目C遺跡第6次調査 (NTM-6)

所在地	南区野多目4丁目277, 278-1他3筆	調査面積	1039m ²
調査原因	宅地造成	担当者	吉田大輔
調査期間	2015.1.6 ~ 4.16	処置	記録保存

位置と環境 野多目C遺跡は、福岡平野を北流する那珂川の西岸に形成された河岸段丘上に立地する。本調査地は遺跡の北西部に位置し、標高約15mを測る微高地である。現況は元耕作地で、隣接道路や周辺の住宅よりも低い。

検出遺構 遺構は、現地表面下30~40cmの黄灰色粘質シルト層および黄灰色砂質シルト層で検出し、縄文時代中期~後期、古代~中世と考えられる遺構が検出された。調査区南端付近では遺構は確認されなかった。検出された遺構の多くは古代~中世のものと考えられ、ほぼ東西・南北方向に延びる溝、土坑等を確認し、遺構からは土師器皿や瓦等がわずかに出土した。縄文時代の所産と考えられる遺構としては、中期~後期の阿高式系土器や条痕文土器が出土した土坑等がある。調査区の中央付近では、東西方向に流れる縄文時代中期~弥生時代前期後半頃の自然流路を確認した。

出土遺物 遺構からは、阿高式系土器や条痕文土器等の縄文土器や石器、古代~中世の土師器皿や須恵器壺、瓦等が出土したが、量は極めて少ない。また、検出した自然流路からは、縄文時代中期~後期の阿高式系土器や条痕文土器、西平式土器等の縄文土器が多く出土し、縄文時代の石礫・削器・搔器・剥片等の石器、弥生時代前期後半の土器、板状の木製品等が出土した。

まとめ 調査では、縄文時代中期~後期と考えられる土坑や古代~中世の溝・土坑等を検出した。遺構密度は濃くないが、南端付近を除き調査区全体に広がっている。特に、調査区の北~東側には縄文時代の遺構が、南~西側には古代~中世の遺構が分布する。また、調査区中央付近の自然流路では多くの縄文土器が出土しており、東側に隣接する第1次調査区で検出された貯蔵穴群等も含め、周辺に縄文時代中期~後期頃の生活域の存在が想定される。



1. 調査地点の位置 (40 老司 147 1:8000)



2. 調査区全景（西から）



3. 溝SD043と自然流路（南から）

1439 福岡城跡第73次調査 (FUE-73)

所在地 城内5番2号

調査面積 262m²

調査原因 史跡整備

担当者 赤坂亨

調査期間 2014.12.18 ~ 2015.3.18

処置 現状保存

位置と環境

福岡城では「国史跡福岡城跡整備基本計画」に基づき城内にあった建物の復元整備計画が進められており、その復元対象である本丸武具櫓の遺構の残存状況の確認と建物構造の把握のための発掘調査を平成25年度より行っている。武具櫓は本丸の一番南側に位置する櫓で、東西隅の三階櫓とその両者を結ぶ二層の多間櫓からなる。今年度は武具櫓の東隅に位置する東三階櫓とその付近の調査を行った。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 193 1:8000)



2. 多間櫓・東三階櫓前面の旧雨落溝 (東から)



3. 東三階櫓と東附平櫓 (北西から)

検出遺構

武具櫓の礎石と前回見つかった雨落溝よりも古い雨落溝（旧雨落溝）を発見した。前回見つかった雨落溝（新雨落溝）の南側240cmに位置している。新雨落溝を造る際に旧雨落溝は埋められたが、一部で旧雨落溝の石列を再利用していることが分かった。その他に埋甃が見つかっている。

出土遺物

軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鰐、鉄製品、鉛製弾丸、磁器などがコンテナケース22箱分出土した。

まとめ

新旧雨落溝の発見により江戸期に武具櫓が建替えられていることが明らかになった。建替えによって多間櫓の東西幅は約4mあることから1階の平面積は約144m²広がることとなる。武具櫓では江戸時代後期に2度の建替えが行われたことが文献で分かっているが、今回の調査はその建替えの具体的な姿を示すものといえる。

1441 麦野A遺跡第23次調査 (MGA-23)

所在地 博多区麦野3丁目11番25,-33,-60,-62

調査面積 347m²

調査原因 共同住宅

担当者 清金良太

調査期間 2015.1.5 ~ 3.6

処置 記録保存

位置と環境 福岡市は大小平野が展開しており、東側から糟屋・福岡・早良・今宿平野に分かれる。麦野A遺跡は福岡平野の御笠川と諸岡川に挟まれた中位段丘上に位置する。この段丘はAso-4火砕流堆積による下層は八女粘土層、上層は鳥栖ローム層からなる洪積台地である。現況の地表面は15.4mであり、西側に向かって緩やかに傾斜している。

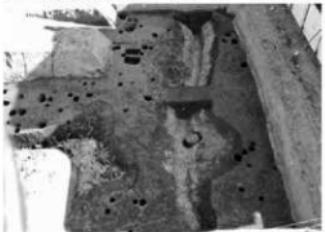
検出遺構 弥生時代中期と思われる土坑が2基出土し、9世紀の井戸2基の上部が切り合う形で検出された。12世紀代の土坑が2基切り合って確認された。また、16世紀とされる溝が出土し、断面は箱掘状である。この溝は第6次、9次、18次、20次調査で検出された方形の区画溝とつながる。

出土遺物 弥生時代中期の弥生土器が土坑から出土した。井戸からは須恵器、土師器の他、木製品である曲物が出土した。方形の区画溝からは遺物量としては少ないが湯釜の鋲部、龍泉窯系の蓮華文を施した青磁碗、玉縁状の丸瓦などが出土している。

まとめ 9世紀代の井戸が2基切り合って検出された。水溜めなどの機能は不明である。16世紀に位置付けられる区画溝について、初めは調査区の南側を通ると予想されていたが、北側を走るようであり、また戦国期の城館の周りに掘削されていた空堀であった可能性が高い。区画内部の様子は不明であり、今後明らかにしていく必要がある。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 48 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. 溝土層断面 (南西から)

1442 箱崎遺跡第72次調査 (HKZ-72)

所在地	東区箱崎1丁目2051番4, 2053番2,	調査面積	167m ²
	2054番1・12・13		
調査原因	共同住宅	担当者	荒牧宏行
調査期間	2015.1.20 ~ 5.22	処置	記録保存

位置と環境 箱崎遺跡北東部の砂丘列に位置する。現在の地表レベルは標高4.0mであるが、地山の砂丘砂のレベルは3.1m～2.8mを示し、西側へ下降している。

検出遺構 調査は2～3面の遺構面を検出して発掘を行った。時期的には11世紀～13世紀が中心となるが、16世紀代とみられる中世末の遺物や遺構も上面の遺構面から検出した。主な遺構は上面で底面に粘土を貼った方形土壙、下面から直線的に東西に走行した、幅2.2m、深さ

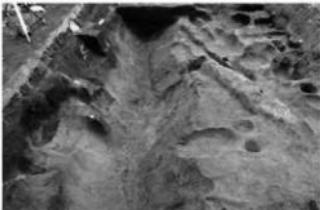


1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 1:8000)

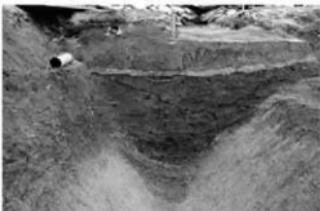
1.2m、断面が急峻なV字状の大溝が挙げられる。さらに下面からは大溝と方向を異にする溝が検出され町筋が変わったものとみられる。また、12～13世紀第の人骨3体が重なり検出され、片付けられたものとみられる。

出土遺物 コンテナケースに44箱分が出土した。その中には古墳後期の須恵器、中世の土師器、中国製の陶磁器、瓦類を含む。

まとめ 11～13世紀代の平安、鎌倉時代の貿易を営む都市の生活遺構が主に発見され、溝から、町筋の方向の変遷がたどれる。13世紀とみられる大溝は防御性の高い区画溝と考えられ、周辺の調査においても瓦の出土が比較的多くみられることや梵鐘鋸造遺構が発見されていることから寺院や宮殿と関連している可能性がある。中世末から近世の遺構は現代までに大きく削平され底面部分のみ残る。



2. 調査区南東部全景（東から）



3. 溝土層断面（東から）

1445 有田遺跡群第258次調査 (ART-258)

所在地 早良区小田部5丁目134番2,131番4 **調査面積**

調査原因 個人住宅 **担当者**

調査期間 2015.2.6～2.25 **処置**

115m²

中尾祐太

記録保存

位置と環境 本調査地点は、有田遺跡群の北側、八手状にのびる台地のうち北西方向にのびる細い台地の北西端に立地する。調査区に北接して157次調査地点、南接して195次調査地点が所在する。

検出遺構 削平をうけており、遺構の残存状況は決して良いとはいえないが、溝3条と柱穴を確認した。これらの溝は周囲の調査地点すでに検出されているものにつながり、過去の調査を勘案すれば、少なくとも1条は中世後半期の館を方形に囲う溝であったと考えられる。さらに本調査地点では、これらの溝に平行する柱穴を検出しており、溝に伴う柵列の可能性が考えられる。遺構は上記のものだけであるが、溝からの出土遺物に甕棺などの弥生土器が数点出土している。

出土遺物 土師器、須恵器、陶磁器などコンテナケース1箱。

まとめ 本調査地点では周囲の調査地点すでに検出されている中世後半期の溝、これらの溝に平行する柵列を確認した。出土遺物から中世後半期のものであり、周囲



1. 調査地点の位置 (90 石丸 309 1:8000)



2. 調査区東半部全景（南から）

の調査例とも矛盾しない。また、本調査地点の南では弥生時代の墓域が確認されており、今回も甕棺片が出土したことから、当該期の墓域が丘陵端部にまで広がっていたが、中世の整地等によって破壊された可能性がある。



3. 柱列完掘状況（北から）

1446 麦野 A 遺跡第24次調査 (MGA-24)

所在地	博多区麦野2丁目11番59地内	調査面積	155.4 m ²
調査原因	農業用倉庫	担当者	久住猛雄
調査期間	2015.2.25 ~ 3.26	処置	記録保存

位置と環境 麦野 A 遺跡は、福岡平野を南から北に貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘中央の中位段丘上に位置する。調査地は、麦野 A 遺跡が立地する段丘（北は高畠遺跡、南は麦野 B・C 遺跡に連なる）のほぼ中央の高所に位置している。調査地は、略南北に延びる段丘尾根からやや東に下る地点にあるが、現在は広い平坦地になっている。周囲標高は、およそ 15.0 m 前後である。

検出遺構 調査区中央から南側では地表下 -45cm～55cm、また北側では -60～70cm 前後で地山の鳥居ローム上面となり、遺構を検出した。検出遺構は、溝状遺構、大型堅穴遺構、凹み状遺構、土坑、柱穴、掘立柱建物である。調査区西縁の溝SD001は、直線的であり調査区外北側に延びる。上層で明代（15～16世紀）の白磁・青花が出土した。大型堅穴SX002と凹み状遺構SX003は平面的に連続して覆土は類似し、本来は一連の遺構か。埋没過程でSX002が新たに深く掘削されたとみられる。いずれも最下層に水成泥質土があり、苑池や溜井の可能性がある。大型堅穴SX004は掘り直しがある。弥生時代の貯蔵穴に似るが、下層遺物から12～13世紀の遺構である。SX004を囲むように同時期の建物SB001があり、SX004は穴倉、SB001はその覆屋と推定される。

出土遺物 パンケース3箱分が出土。飛鳥時代～中世末期（戦国時代）までの、土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器などが出土地した。

まとめ 多くの遺構は平安時代末期以降から戦国時代までだが、古代（飛鳥時代末期～平安時代初期）の遺物が多



1. 調査地点の位置 (I2 麦野 48 1:8000)



2. 調査区全景（南から）



3. 建物SB01と堅穴SX004（東から）

くあり、東に隣接する23次調査にあるような古代の遺構が削平されているとみられる。中世後半の溝SD001は、周囲で確認される壕で囲郭された120×160mの方形館の内部を区画する溝であろう。竪穴SX004のような中世の貯蔵穴状竪穴は、同じ麦野A遺跡内で数例の確認がある。24次調査では、麦野A遺跡における古代から中世の遺跡の展開を確認することができた。

1447 吉塚祝町遺跡第3次調査 (YZI-3)

所在地 博多区吉塚1丁目538-1

調査面積 82.5m²

調査原因 共同住宅

担当者 大塚紀宣・細石朋希

調査期間 2015.3.2～3.27

処置 記録保存

位置と環境

吉塚祝町遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地する。箱崎砂層は博多湾南岸、東区箱崎から室見川河口に至る範囲に分布し、海岸部に平行した幾列かの砂丘を形成しており、調査区はその砂丘の一つに位置している。

検出遺構

第1遺構面は現地表面より80cm程の深さにあり、黒褐色砂質土層で検出した。遺構は、土坑12基、ピットが確認できた。土坑の内3基からは底部糸切りの土師質土器の壺・皿がまとまって出土した。13～14世紀代の遺構と考えられる。最も大型のもので径1.5m、深さ45cmの円形を呈する。第2遺構面は現地表面より120cm程の深さにあり、明褐色砂質土層で検出した。遺構は、井戸2基、土坑7基、ピットが確認できた。土坑の内1基は上面と同様に土師質の壺・皿がまとまって出土し、その下部に90cm×70cmの隅丸方形を呈する深さ60cmの掘り込みがあり、棺台とみられる掌石と釘、土師質の壺・皿が出土した。中世の座棺を埋置した葬礼関連施設と考えられる。また井戸は径3.6m、深さ1.5m程の掘方を持つ中世のものと、掘方の径1.9m、深さ1.7m、井筒の径55cmを測る古代のものがあり、後者からは両黒の黒色土器椀が出土している。

出土遺物

土師質の壺・皿、黒色土器椀、須恵器の他に磁器小片、鉄釘、銅錢。総量はパンケース10箱分。

まとめ

調査区の西と東で遺構の様相が異なり、東側は中世の土器溜まりが多い一方で、西側では古代の遺構が多い。当該地区では古代～中世にかけて集落が営まれていたものと考えられる。

1448 比恵遺跡群第136次調査 (HIE-136)

所在地 博多区博多駅南3丁目40番1

調査面積 335m²

調査原因 共同住宅

担当者 加藤良彦

調査期間 2015.3.2～4.10

処置 記録保存



1. 調査地点の位置 (35 吉塚 2779 1:8000)



2. 調査区北半部 (南東から)



3. 土師器皿出土状況 (南から)

位置と環境

遺跡は福岡市の中南部、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた北側の洪積台地上に位置する。調査地は遺跡群の北端近く、第4次調査の南、第68次調査の西に隣接する。試掘の結果、遺構が検出された予定建物の北半部が調査対象となっている。

検出遺構

GL-100cm、標高4.5mの鳥栖ローム上面で、弥生前期の土壌1基、貯蔵穴3基、弥生時代中期後半～末の円形堅穴住居1軒、溜井か谷の肩と湿地堆積1条、柱穴少々を検出した。後世の削平が著しく、堅穴住居は柱穴しか遺存しない。

出土遺物

遺物のほとんどは湿地堆積部からの出土で、下層から木製鋤2点、上層から大型簡型器台、瓢形土器、高环等丹塗りの祭祀土器片が目立つ。調査区側から流れ込んでおり、堅穴住居の住人による祭祀跡と思われる。ほかに上層から蓮実1点が出土した。貯蔵穴から炭化米は出土しなかった。

まとめ

遺跡群北端部に展開する弥生時代前期・中期集落の南端に位置するとおもわれる。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全貌 (南東から)



3. 掘出土状況 (北西から)

1449 博多遺跡群第204次調査 (HKT-204)

所在地 博多区古門戸町53番

調査面積 229m²

調査原因 共同住宅

担当者 屋山洋

調査期間 2014.3. ~ 7.17

処置 記録保存

位置と環境

博多遺跡群は北が博多湾に面し、東西を御笠川、博多川に挟まれ、南側を房州堀で区切られる南北1.5km、東西0.8kmの範囲である。

検出遺構

今回発掘調査を行った204次調査区は博多遺跡群の北西隅に近い。南側に隣接する165次調査で東西方向の道路が検出されたが、今回は調査区西側で道路の継ぎが出土した。道路は12世紀中頃から後半頃に築かれ始め、その後は少しずつ南側の165次側に移動するが、13世紀後半～14世紀初めに大きく北側に振れて再び本調査区内で検出されるようになる。16世紀頃の道路北側側溝は、底面に根石を並べていることから布掘状の壁が設けられていた。溝は調査区西端で北側に曲がっているが、等高線に沿って曲がってい

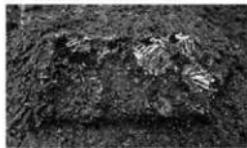


1. 調査地点の位置 (48 千代博多 121 1:8000)

るのか、敷地の境界等のためかは不明である。道路以外で検出した遺構は古代～中世が井戸2基、地下式住居が1基、土抗と柱穴が多数、その他造成時の祭祀と思われる痕跡がある。近世が井戸2基、甕棺墓1基、石組み遺構1基、その他土抗數基である。道路築造以前の遺構としては井戸や大型土抗がみられるが、道路築造以降は大型土抗は少なく、根石を持った柱穴が全体にみられるようになる。根石は小さなものがほとんどで、道路上に面して小型の掘立柱建物が並んだ状態が長く続いたものと思われる。近世になると井戸や大型土抗がみられるようになるが、甕棺は一度埋めた後に底部だけ残して掘り返すなど特殊な状況で、墓ではない可能性も考えられる。



2. 調査区全景(北東から)



3. I区4面出土漆器痕跡

1450 板付遺跡第74次調査 (ITZ-74)

所在地 博多区板付5丁目2番220

調査面積 7.4m²

調査原因 個人住宅建設

担当者 池田祐司・井上蘭子・横山邦継

調査期間 2014.4.28

処置 柱状改良施工

位置と環境

板付台地西側の低地に位置しG7a調査区から南に60mほどである。南側隣接地は台地上で71次調査が行われ、東側の47次調査では2枚の水田面を検出している。当該地では昭和63年に試掘を実施し足跡状の痕跡を確認している。今回の計画では申請地中央に柱状改良が行われるため、破壊される個所に沿って調査区を設定した。

検出遺構

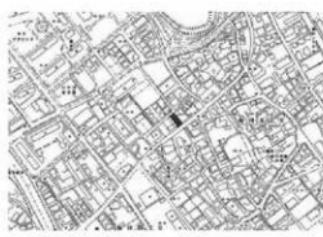
表土、客土の下に1.旧水田層、2～4.暗灰色～灰褐色粘質土層、5.灰褐色砂まじり土層、6.粗砂層、7.黒灰色粘土層、8.黒褐色粘土層の堆積を確認した。2から5は旧水田層と考えられる。粗砂層直下の7層上面では、足跡・生痕状の遺構、溝状の遺構を検出した。また、土層で畔状の高まりが見られたが平面的には確認できていない。周辺の調査から突堤文期から弥生前期水田面の可能性があり、植物珪酸体を検出している。

出土遺物

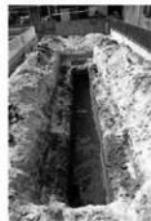
遺物は少なく、4層の粘質土から弥生土器、土師器(古式土師器)の小片が出土した。8層出土の木材は放射性炭素年代測定で 13800 ± 35 年BPの年代を得ている。

まとめ

粗砂で覆われた7層上面が、弥生時代の水田面の可能性がある。周辺の試掘等の土層と対応しており、水田面が広がる可能性がある。今回の建築では柱状改良のため遺構面に影響があるが、それ以外については、遺構面が保存される。



1. 調査地点の位置(24板付94 1:8000)



2. 調査区全景(南東から)



3. 土層(南から)

1404 井尻B遺跡第41次調査 (IGB-41)

所在地 福岡市南区井尻五丁目331番3地内 調査面積 206m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 杉山富雄
 調査期間 2014.4.14 ~ 5.26 処置 記録保存

1. 調査の経緯

平成27(2014)年1月28日付で、市内南区井尻五丁目331番3地内で予定される共同住宅建設に伴い、同地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。当該計画の基礎工事が地下に影響を与えることから、埋蔵文化財審査課では2月21日確認調査を実施し、地内に埋蔵文化財の分布を確認した。これを受けて埋蔵文化財の現状保存のため、工事計画との調整を行ったが、影響を避けることはできず、記録保存のための本發掘調査が必要との判断に至った。調査は、基礎工事が地下に影響を与える建物部分2箇所について行うこととし、埋蔵文化財調査課を担当として4月14日着手した。

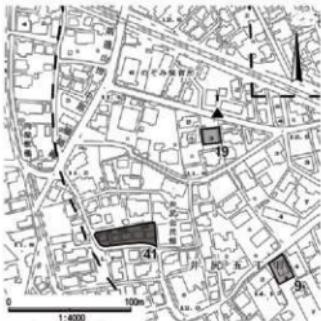
発掘調査は、西側の調査区を1区とし、表土を機力により鋤き取った後、人力により遺構確認・掘削、記録を行った。1区完了後埋め戻しを行い、東の2区についても同様の手順で進め、調査を完了したのは5月26日である。

2. 立地と既往の調査

立地 井尻B遺跡は、博多湾奥福岡平野に南から北へ向かって島状に残る中位段丘の一つに立地している。段丘上には阿蘇4火砕流堆積物が載り、これが地山面となることが多い。遺跡が立地する段丘は、南北に長く不整な紡錘形状の台地となる。宅地化する前の地形は、その南部(15m余)と中央部(4m余)に最高所があり、全体はごく緩やかに北へ下っていたことが分かる。台地周縁部の低地は、道路上の標高で11mを前後する高さがある。

第41次調査地は、台地西南縁部に位置する。この位置は、北に西側から回り込む谷があり、半島状の地形となっている。調査地は、その南辺部に位置し、前面の道路がほぼ台地と西の低地との境界を示しているようだ。調査においても西の1区西1/3は河川堆積による砂層に覆われ、それ以東は阿蘇4火砕流堆積物が地山として検出された。

既往の調査 井尻B遺跡では、昭和56(1981)年度以降、平



1. 調査位置図(25 井尻、90 1:4000 現況)



2. 調査位置図(1:4000 旧状)



3. 井尻B遺跡第41次調査区(1:500)



4. 井尻B遺跡41次調査1区全景（東から）



5. 井尻B遺跡41次調査2区全景（西から）

成26（2014）年度末までで43次にわたる発掘調査を行っている。このうち、今回の第41次調査地点周辺では、やや離れて北東方向から南へ第19次、第21次、第9次の調査地点が位置している。第19次地点は上述した北方の谷の対岸にあり、古代の瓦を出土する。古代の瓦の分布は遺跡中央に濃いが、第9次地点から第21次地点まで及ぶ。第21次地点では弥生時代中期の甕棺墓の広がりが確認された。弥生時代終末期の堅穴住居は第9次地点にも分布し、掘立柱建物も復原されている。

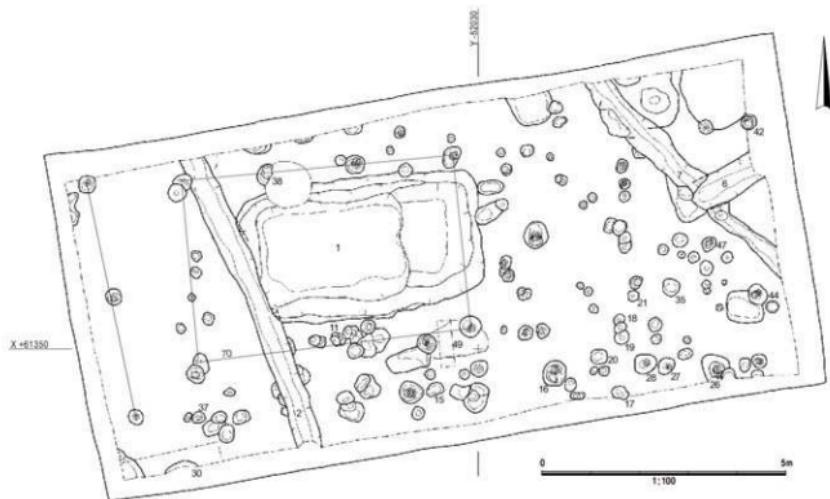
3. 調査遺構と遺物

調査地は、東西に長く、僅かに西へ向かう勾配があり、西端で標高11.5m程、東端で標高11.7m程となる。調査区は17mの間を置いて、西を1区、東を2区とした。調査面積206m²のうち、1区108m²、2区97m²の範囲を調査した。1区の表土層の厚さは0.5m前後、地山面は標高11m弱の位置で、わずかに西へ傾斜する。調査区の西1/4は、河川堆積物（粗砂層）に覆われ、この面が遺構検出面となる。それ以東は台地の阿蘇4火碎流が遺構検出面となるが、上部の粘土質部位は部分的にしか認められない。2区は、表土層が南辺側で厚さ0.5m、北辺側は0.8～1.1mとなる。したがって地山は北西部が低く、標高10.6m程、それ以外は

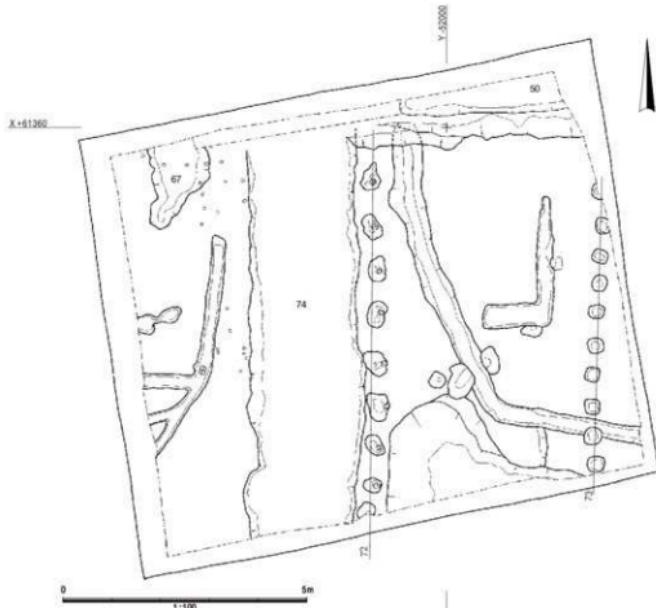
概ね11mを前後する。地山面は上部を削平された状態の阿蘇4火碎流堆積物である。

調査では、遺構番号として69基を登録したが、遺物の出土を見たのは39基で、近世以降とするもの13基、中世17基、古墳時代3基、弥生時代3基、不詳4基という内訳となる。1区の遺構は、西の砂層面ではやや疎となるが、そのほかは、ほぼ満遍なく分布している。

うち、北西方向に向かう溝2・7、土壤6及び調査区北東部の土壤群は全て近世以降の遺物を出土する。2区



4. 井戸B遺跡41次調査1区全体図 (1:100)



4. 井戸B遺跡41次調査2区全体図 (1:100)

では溝が顕著であるが、溝50を除く溝から近世以降、近現代の遺物を出土する。ところで、調査中の聞き取りによれば、現地には戦時中、防空壕が設けられており、その構造は周囲を掘り上げ、その土砂で被覆したもの（おそらく半地下式）であり、そのための土取り跡が池状を呈していたとのことであった。1・2区では防空壕本体とできる遺構は確認できなかったことから、それは調査区の間の空間に位置したものと想定して、遺構74を上記土取り跡と見なすことができる。また、遺構74・杭列72・柱穴列73が、軸方向を揃えることから一連の施設として設けられたものである可能性が高い。ちなみに杭列72・柱穴列73は全て抜き取られている。また、2区西側へ続く溝69が、防空壕の排水溝として西からの排水を集めることにあった可能性がある。

中世以前の遺構の大部分は、柱穴、小穴である。大形の遺構は土壤1、掘立柱建物70・71、溝50がある。以下、主要な遺構・出土遺物を報告する。

掘立柱建物70（図8）長軸が東西方向で、1間×3間の建物と復原できる。桁行5.6m、梁行3.6m。柱穴は、径0.4m前後の不整な円形、梢円形状で、深さ0.3～0.5m程。柱間は桁行方向1.8～1.9m。柱穴埋土中から土師器・瓦が小量出土した。大半は極細片のため時期等不詳。図示する柱穴23出土遺物19は瓦質土器鑿鉢口縁部細片である。外面に指押さえ痕、内面に撫で調整、粗い搔き目が施される。胎土は緻密で、内面黒色、外面灰褐色～黒色。他に瓦細片の出土があった。

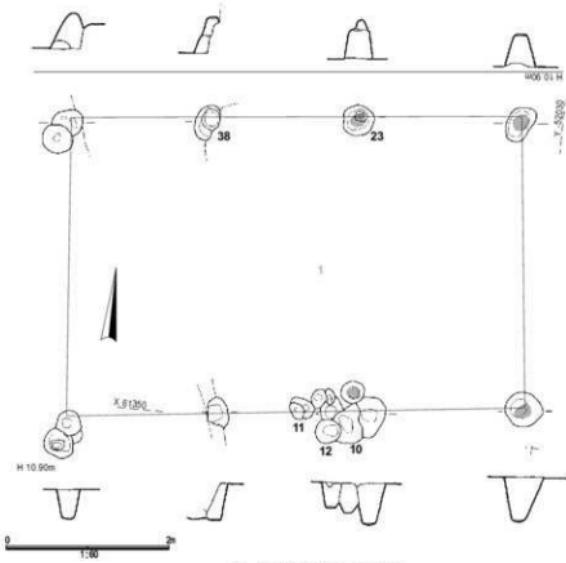
掘立柱建物71（図4）南北方向2間分を検出した。両端方向とも調査区外となり、平面形不詳。柱穴は深さ0.3m、径0.3mの円形状。形状が揃い、各柱穴で柱痕跡を認めた。柱間は、ほぼ等間隔で2.5m。柱穴から遺物の出土はなかった。

土壤1（図9）掘立柱建物70と重なり、長軸を合わせるような位置にある。平面隅円長方形で、断面は漏斗状に上方が開く逆台形状を呈し、自然に埋没したものと見える。底面には段があり、掘削が2度に及んだものか。覆土は黒褐色の粘質土、壁際では砂層をレンズ状に挟み、下部では粘土となり、雨水が間欠的に流入したこと示している。西端部が溝2と重複して古い。長さ5.0m、幅2.9m、深さ0.7mを測る。遺物は、覆土の各所から中コソナ1/3程の分量が散漫に出土した。大半が細片の土器類で、土師器壺皿、鍋釜等のほかに、輸入陶磁器に白磁、龍泉窯系青磁がある。また、瓦質の瓦が含まれる。石製品では板磚断片、金属製品には刀子も含む。10図に主な出土遺物を図示する。

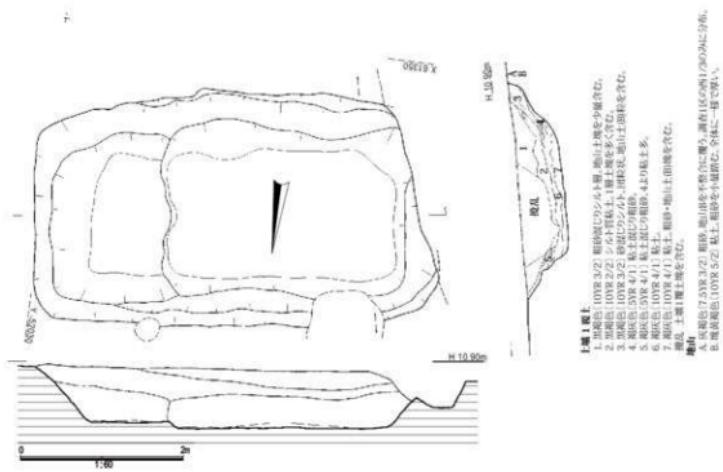
114・104は底部を糸切り離しする土師器壺である。114は口縁部が大きく開き、鈍い黄橙色を呈す。口縁部径11.2cm、底部径6.7cm、器高1.9cmを復原できる。104は底部細片で、復原底径8.9cmとなる。106・107は龍泉窯系青磁碗である。106は片彫りの蓮弁文で鑄を削りださない。内外面に化粧掛けのうえ薄く施釉する。施釉部は黄緑味の灰色を呈す。107は碗底部破片である。内底面に断続する笠切りの圈線、中央に印花文を施す（写真）。釉は高台内面の一部に及び、施釉部は黄緑味の灰色を呈す。高台部径5.2cm。108は白磁碗底部で、高台基部の外側から打ち欠き、円盤状に整形している。割れ面に打点が明瞭に残る。釉は高台内外面の一部に及び、施釉部は灰白色を呈す。高台部径5.1cm。103は土師器、112は瓦質土器鍋の口縁部細片である。111は土師器釜口縁部付近の体部細片である。外面は焼成した黒色を呈す。101は、古墳時代の土師器高杯脚部細片とする。110は板磚断片である。上端部片側の資料で、頭部を山形に整形し、水平方向に不整な2状の凹線を刻む。砂岩製、現状の高さ13.6cm、厚さ7.0cm。7は刀子か、先端の欠失部端面に凹面が形成されている。これが腐食等に依るものか不明。器表に銅錆が浮かび、著しく腐食する部分がある。銅合金製か。長さ8.4cm、身幅1.1cm。側面観では関節が膨隆し、茎部は薄い。

溝50（図5・7）2区北辺をかすめ、ほぼ東西に走る溝である。北岸は調査区外となる。調査区東半部に現れる底面は、ほぼ水平である。調査区東壁際で地山からの深さ0.5mを測る。黒褐色の粘質土で下部が埋まり、上部は暗褐色のやや軟質の覆土である。下部覆土から土師器壺・皿類、輸入陶器が細片で出土した。

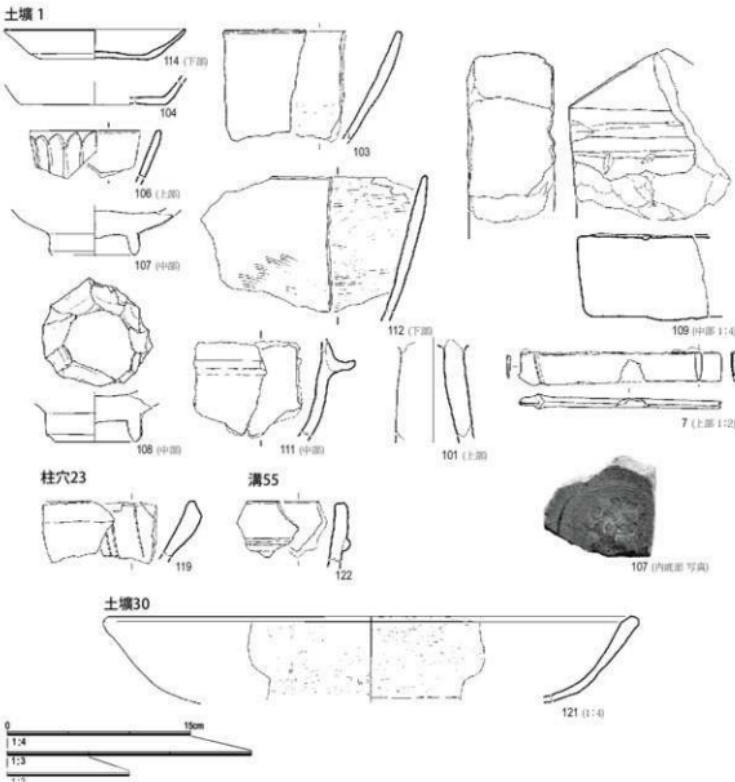
柱穴26 柱痕跡が明瞭で、柱根も遺存していたが、建物の柱穴として復原することはできなかった。中世土師器



8. 推立柱建物70 (1:60)



9. 土壌 1 (1:60)



9. 井戸B遺跡41次調査出土遺物 (1:3・1:4) ※特に記さないものは、縮尺3分の1。

を出土した。

その他の遺構・遺物 122は2区の溝55から近世遺物に混じって出土した土師器火鉢口縁部細片である。軟質で、口縁部直下外面に断面半円状の突帯を貼り付ける。121は1区の土壙30から出土した。土師器焰烙である。遺存状態良好で、内外面に刷毛目調整痕が残る。外面に煤状の付着物が残る。近世遺物か。

4.まとめ

井戸B遺跡第41次調査地点は、遺跡の立地する台地の南西部、半島状の地形の南縁部に位置している。調査は台地が低地に接する1区と台地の高まり上の2区について行った。1区では、近世以降の遺構を除くと、土壙、掘立柱建物、柱穴を確認した。遺構の年代は、一部の柱穴の他は中世と考えられる。出土遺物からみると、柱穴には古墳時代、弥生時代のものが少數ある。2区は、南辺の溝を中世とする他は近世以降、近現代のものと考えられ、地山の状況も併せて本来の台地の高さ(標高12m程)を、1m前後削平した上で整地したものとみえる。

今回調査地では、中世の遺構、遺物が頗著であり、他調査地点とは異なる。周辺に板碑、神社の分布もみられ、戦前からの集落内に位置することなども考えると、一帯は中世から現在に継続して居住地として利用されてきたものと思われる。

1407 有田遺跡群第254次調査 (ART-254)

所在 地 早良区小田部1丁目174番1

調査面積 93.4 m²

調査原因 個人住宅建設

担当 者 星野恵美

調査期間 2014.5.14 ~ 5.29

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

平成26年2月17日福岡市教育委員会埋蔵文化財審査課に早良区小田部1丁目174番1における専用住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け、同課では同年4月18日に試掘調査を実施した結果、柱穴等の遺構を検出したため、協議を行ったが、工事の掘削深度が遺構面に達するため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

2. 位置と環境

有田遺跡群は、早良平野北側の室見川と金屑川に挟まれたAso-4火砕流堆積物に起因する独立中位段丘上に立地する。台地の北側には細長い谷が複数開析し、舌状の支丘を伴う八手状の地形を呈する。調査地点は北側の突出部に位置し、本来は中央部に低い尾根が北西方向に走っていたと考えられるが、現在は宅地造成等でほぼ平坦となっている。調査区は尾根の東側斜面に位置する。

3. 遺構と遺物

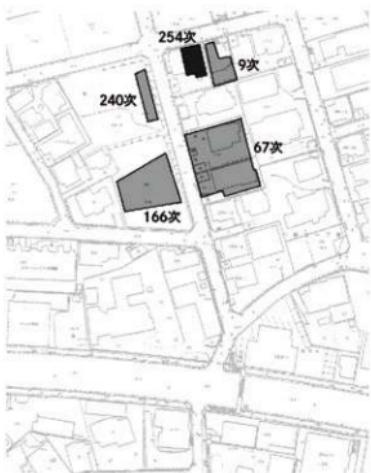
遺構面は現地表面より南側は40cm（標高6.7m）、北側は80cm（標高6.3m）の深さにあり、鳥栖ローム上面で検出した。南側ではロームが粘質を帯びており、遺構も少ないため、大きく削平を受けていると考えられる。その上層に厚さ20mm程の少量の土師器・須恵器を含む黒褐色土の包含層が堆積する。今回検出した遺構は、古墳時代中期後半の竪穴住居跡1軒、古墳時代中期前半の土坑1基、柱穴である。

SC01 (第6・7図)

調査区北側に位置し、調査区外へ延びる方形の竪穴住居跡である。遺存状況は悪く、現況で東西約4.7m、南北3.5m以上、壁の残存高は約20cmを測る。東側と西側に削り出しのベッド状遺構を敷設し、その内側を周溝が巡る。周溝内に10cm前後のピットを検出したが、土にしまりがなく、根等の生痕と考えられる。ベッド状遺構の幅は東側で約80cm、西側で約55cm、高さはともに約10cmである。貼り床は掘削時確認できなかったが、調査区北壁で、黄褐色土に黒褐色土を含む厚さ10cmほどの層（8層）があり、貼床の可能性が考えられる。主柱穴は4本であり、そのうち2本を調査区内で検出した。直径約25~30cm、深さ約40~50cmを測り、ともに下層には白色粘土が堆積していた。土



1. 調査地点の位置 (82 原 309 1 : 8000)



2. 調査区周辺図 (1 : 2000)

師器・須恵器が出土し、時期は古墳時代中期と考えられる。1～3は土師器で、1は甕、2は壺の口縁部、3は底部片である。ともに明褐色を呈し、白色砂粒を多く含む。4は須恵器の大型壺の小破片で、硬質で灰色を呈する。5は黒曜石の剝片で、使用痕と考えられる細かい剥離がみられる。わずかに残る自然面が平であり、漆黒色を呈することから石材は腰岳と考えられる。

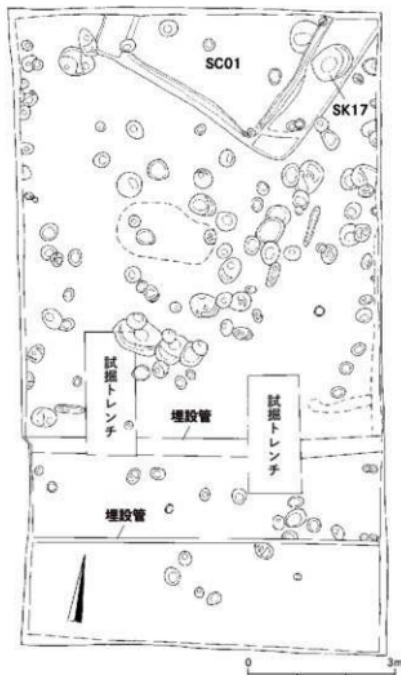
SK07（第6・8図）

調査区北側SC01の上面で検出した。長さ80cm、幅70cmの楕円形を呈し、深さは20cmであり、覆土は暗茶褐色土を呈する。土師器の高杯、甕の破片がまとまって出土し、時期は古墳時代中期前半と考えられる。6～10は土師器で、ともに白色砂粒を含み、7・9・10は赤褐色粒もみられる。色調は黄橙色を呈する。6は鉢、7は平底の甕、8は小型丸底壺、9・10は高杯の脚部である。

他に柱穴を検出したが、建物を復元することはできなかった。柱穴からは土師器・須恵器の小片や鉄製刀子の細片が出土した。

4.まとめ

調査区は削平が著しく、特に南側は柱穴等の深い遺構しか残存していなかった。遺物は弥生時代のものも少量出土するが、大半が古墳時代のものである。東隣の9次調査・西側の240次調査では古墳時代中期の堅穴住居跡、南側の67次調査では詳細な時期は不明であるが、古墳時代の堅穴住居跡と掘立柱建物群の集落も確認されている。本調査地点も周辺の調査区と同様、古墳時代を中心とした集落が営まれていたと考えられる。



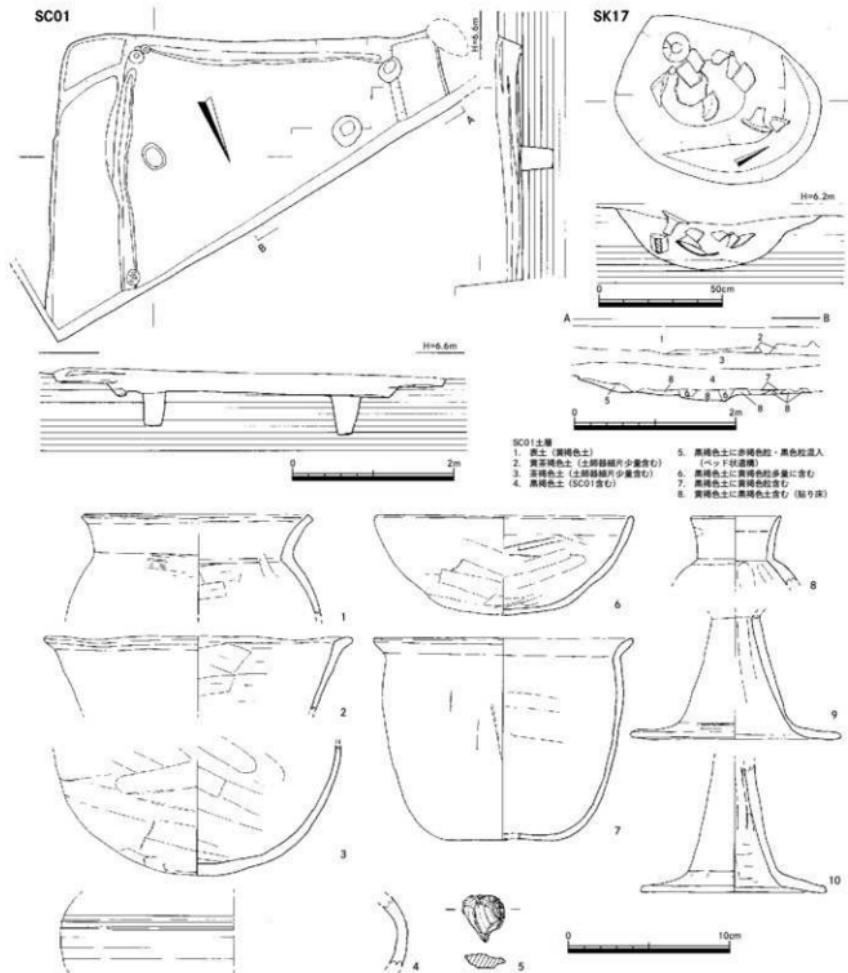
3. 第254次調査遺構配置図 (1:100)



4. 調査区北側全景（西から）



5. 調査区南側全景（西から）



6. SC01・SK17と出土遺物実測図 (1:60・1:20・1:3)



7. SC01 (東から)



8. SK17遺物出土状況 (東から)

1416 諸岡B遺跡第24次調査 (MRB-24)

所在 地 博多区諸岡1丁目17-25

調査面積 266m²

調査原因 共同住宅建設

担当 者 細石朋希・星野恵美

調査期間 2014.7.14 ~ 8.1

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

今回の調査は平成26（2014）年6月5日、所有者より福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課に博多区諸岡1丁目17-25の一部における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である諸岡B遺跡内に位置しており、同一敷地内において過去に第15次調査が、隣接する東側の土地では第14・17・18次調査が実施されている。

6月27日に重機を使用して試掘調査を行ったところ、第15次調査区で確認された溝の延長と、柱穴らしき掘り込みを確認した。同課では、この結果を受けて所有者側と協議を行い、本調査のはこびとなった。

2. 位置と環境

諸岡B遺跡は福岡平野東部の御笠川・那珂川に挟まれたAso-4火砕流堆積物に起因する独立台地上に立地する。

今回の調査地点は諸岡B遺跡の北端部やや西よりに位置する。

遺構面は表土下40～50cmの鳥栖ローム上面で検出し、標高は北端で10.0m、南西端で9.5mである。

遺構面は大きく削平されており、遺構の残存状況は悪い。

3. 検出遺構・出土遺物

今回検出した遺構は溝1条、地下式土壙2基、柱穴である。

柱穴は、建物としてプランを確認するには至らなかつた。



1. 調査地点の位置 (24 板付 93 1 : 4000)



2. 調査区南部全景 (西から)



3. 調査区北部全景 (西から)

1) 溝

SD01 (図4)

検出面で幅75~115cm、深さ20~55cmを測り、調査区の北西隅から南東に向かって深さを減じつつ伸びる。本調査区北西の15次調査区(図8)で確認された16世紀前後の可能性がある溝の延長とみられ、東西16m×南北24m以上の長方形にめぐるものと推定できる。

堆積状況からみて(図4下)水は流れおらず、廃棄後徐々に埋没したものと考えられる。

遺物は土師質・瓦質の土器小片がわずかに出土した。

2) 地下式土壌

SK17 (図5左、写真6)

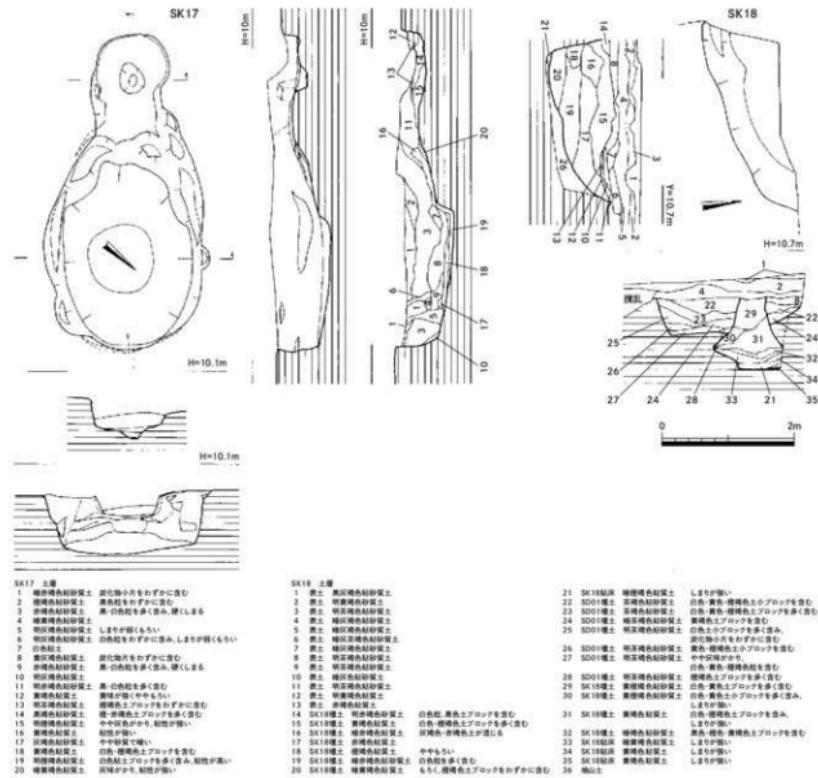
調査区北側中央に位置する。平面瓢箪形を呈し、壙底面の全長が4.7m、壙室が1.9×2.8mを測る。堅穴部は南西側に開口し溝SD01に直交する。残存する深さは0.9m程である。堅穴部をSD01に切られ、SK17の廃棄後にSD01が埋没した可能性が高い。壁面はオーバーハンプグしてあり、壙室には硬くしまる地山土を用いた貼り床(16・18・19・20層)を敷設する。地山の土を含む土が堆積しており、天井部が一度に崩落して埋没したものと考えられる。また縦方向に延びるしまりの弱い層があり(5・6層)、有機物の腐食痕跡と見られるがこれらは互いに平行で、木製の構築物であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

SK18 (図5右、写真7)

調査区北西隅に位置し、構造の大半は調査区外北西方向に伸びる。SK17と同様の平面瓢箪形を呈する同規模の土壌が想定できる。堅穴部は南西側に開口し溝SD01に直交する。残存する深さは0.9m程である。底には地山の土に似たしまりの強い土が堆積し(33・34・24・35層)、その上には一部薄く暗褐色の混じり土が堆積しており(32層)、前者が貼り床、後者が使用時の堆積層と考えられる。その上部はSK17同様、壁面はオーバーハンプグし地山の土を含む土が堆積する。天井部の崩落によるものか。堅坑部がSD01を切り、SD01の埋没後にも使用されていたことがわかる。遺物は出土していない。



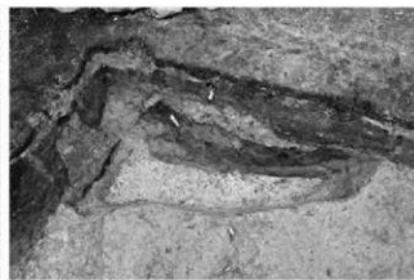
4. 諸岡B遺跡24次調査区全体図(1:200)
・SD01土層断面図(1:40)



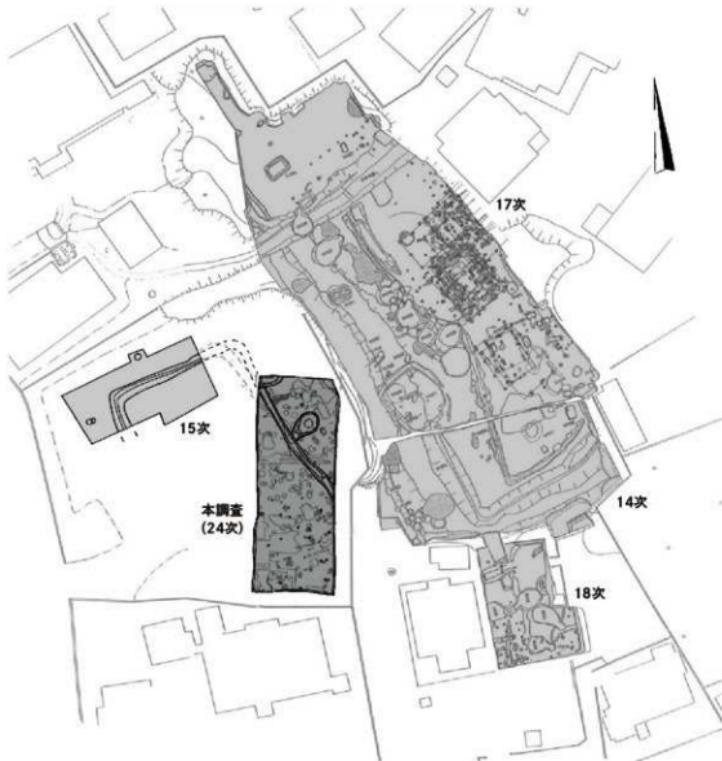
5. SK17・SK18実測図 (1:80)



6. SK17 (北西から)



7. SK18 (南東から)



8. 諸岡B遺跡北部 (1 : 600)

まとめ

今回確認した溝は同一敷地内北西の第15次調査区で確認された区画溝の続きであり、短辺が約16m、長辺が24m以上の長方形に廻るものと考えられる。また、この溝の長辺は14・17次調査区の屋敷跡の向きに並行しており、この屋敷に関連する施設があった可能性がある。溝や建物跡、地下式土壙などの遺構は、諸岡B遺跡南部の4次調査区や9次調査区、12次調査区でも確認されている。当時この小丘陵の上には、溝によって区画された屋敷を中心とした村落が営まれていたと考えられる。

また、地下式土壙はともに墻室を北東に、竪坑を南西に構え、入口である竪坑部と溝SD01が重なる。土地を方形に区画するSD01の内側から外側に向かって直角に延びる点も共通しており、これは14次調査区においても類似した状況が確認できる。しかしながら本調査においてSD01、SK17、SK18は明確に切り合い、その新旧関係は古いものからSK17—SD01—SK18の順になっている。よってこれらの遺構の同時並存は考えにくい。これらの状況からみて、地下式土壙も溝も共に、その方向に対する規制があったものと考えられる。

今回の発掘調査では時期を特定できる遺物が出土しなかった。ただし溝については15次調査の結果から16世紀前後の可能性が高い。

1423 大橋E遺跡第12次調査 (OHE-12)

所在 地 南区三宅 1 丁目1101-3の一部

調査面積 63m²

調査原因 個人住宅建設

担当 者 池田祐司・比嘉えりか・山崎龍雄

調査期間 2014.9.12～9.20

処 置

調査概要

立地と歴史的環境 (図1・2)

調査地は福岡平野を北に貫流する那珂川の西側に所在する大橋E遺跡の西部に位置し、標高は11mを測る。大橋E遺跡の西側は油山山塊から派生する低丘陵で、丘陵部先端には今は開発で失われてしまった古野城があり、江戸時代秋月藩主大蔵種周によって城絵図が造られている(註1)。西側150m離れた地点には三宅廢寺が所在し、各種開発に伴って調査が行なわれている(註2)。本遺跡に於いても、各種開発に伴って調査が行なわれており、弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺構・遺物が検出されている。調査地周辺では北側に第3次、東側で新道建設に伴って第9次調査などが実施されている。各調査の概容については個別の報告書を参考にされたい。



図1 第12次調査地点位置図 (39 三宅 2382 1:6000)

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市南区三宅 1 丁目1101-3の一部に個人専用住宅建設の為の埋蔵文化財の有無についての照会を平成26(2014)年9月3日付けで受理した。これを受けた申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地の大橋B遺跡に含まれていること、北側で第3次調査が実施されていることから、試掘調査を実施した結果、現地表下100cmで遺構を確認し、遺構の保全などに申請者と協議を行なった。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できることから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。工事の日程が詰まっており、調査に緊急を要することから、国庫補助事業として、平成26年9月12日から調査を行なうこととした。調査区は廃土処理の関係から3分割して行ない、当初は文化財審査課事前審査係の池田祐司・比嘉えりかが東側1/3を行ない、その後埋蔵文化財調査課の山崎龍雄が引き継いで残り2/3の調査を実施し、翌平成27年度に山崎が資料整理・報告作成を行なった。

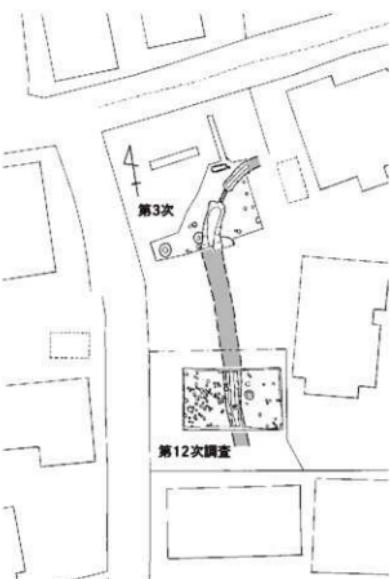


図2 第3次・12次調査で検出した溝 (1:500)

遺構と遺物（図3～5、写真1～4）

調査区の基本層序は図5のとおりで、厚さ80cm前後の花崗岩バイラン土の客（盛）土下、厚さ20cmほどの旧水田耕作土下で鈍い黄褐色粘土（鳥柄ロームか）の遺構面を検出した。検出遺構は溝1条、土坑1基、ピット群などである。

SD01（図5、写真2） 調査区中央部で検出した南北方向の溝。この溝は北側の第3次調査区溝に繋がる溝である。溝幅は1.5m、深さは北壁で0.7m、南壁で0.65mを測る。溝断面形は逆台形を呈す。埋土は上層から中層にかけては黒褐色粘土と鈍い黄褐色粘土ブロックの混合土、下層は褐灰色粘土に鈍い黄褐色粘土ブロック混入土が主体で、グライ化している。埋土の状況から見て、溝は水が溜まりやすい状況にあり、短時間で人為的に埋められた状況を示す。遺物は主に上層から出土したが、量は少ない。古墳時代から中世の土師器・須恵器、中国産輸入磁器などが出土している。1～4は上層出土。1は中世の土師器壺か皿口縁部細片。外底部回転糸切り、体部は外面ヨコナデと内面ナデ。器壁色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良。2は土師器の小型の把手。器壁は摩滅がひどいが、調整は指押え仕上げか。3は須恵器蓋口縁部1/12片。口径は推定で15cm強か。天井部は回転ヘラ削り、その他はナデか。色調は灰色を呈す。4は滑石製石鍋破片。6.0cm×4.2cmを測る。器壁は傷みがあるが、外面煤が付着し、内面は削り後ケンマ。5は中層出土。須恵質の瓦片。凹面は布目痕、凸面縄目叩きを施す。色調は灰色を呈し、胎土は1mm内外白色砂粒含む。

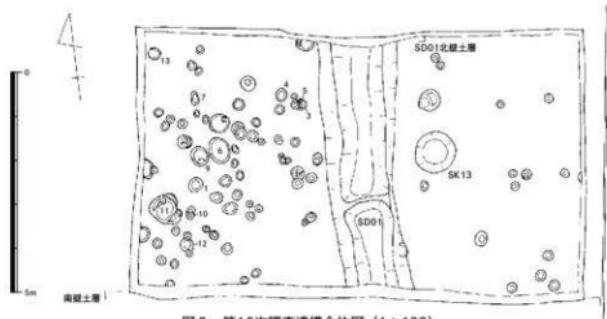


図3 第12次調査構全体図 (1:100)

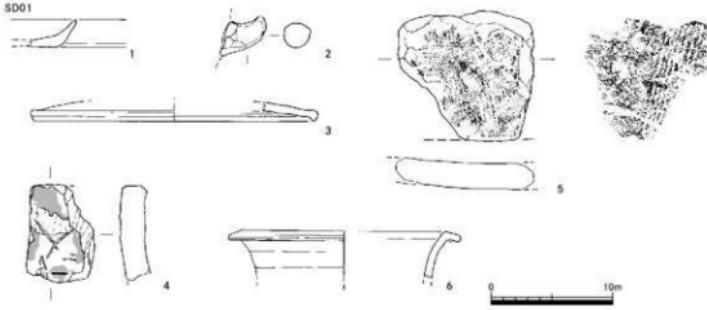


図4 SD01・SP09 出土遺物 (1:3)

SP09出土遺物（図4） 5は須恵器壺口縁部1/8片。口縁径は復元で14.2cmを測る。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色を呈し、胎土は精良。

まとめ

今回検出された主な遺構は1条の溝と土坑、ピット群である。1条の溝は北側第3次調査から続くものである。両調査区で確認した規模は28mで、南と東側に更に延び、隅は丸味を帯びるが方形区画を成すものと推定される。溝の時期は出土遺物が小片で量が少なく、断定は出来ないが、古代～中世前期の時期に比定出来る遺物であり、第3次調査（註3）でもほぼ同時期のものが多いくことから、中世前期頃に方形区画を持つた屋敷地があった可能性が高い。周辺での調査に注意を要する。

註1 那珂郡三宅郷古野城ノ図（『古戦古城之図（2、4）』4冊51、独立行政法人国立公文書館所蔵）

註2 昭和52年の第1次調査以来、現在迄5次に亘る調査が行なわれている。

註3 福岡市教育委員会『大橋E遺跡3次調査の報告』福岡市埋文化財調査報告書第279集 1992



写真1 調査区東側遺構全景(西から)



写真2 SD01(北から)



写真3 調査区西側遺構全景(東から)



写真4 SD01北壁土層(南から)

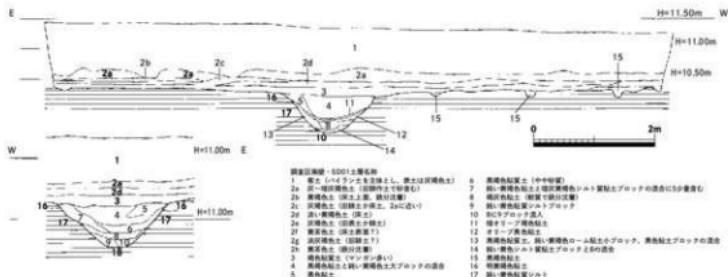


図5 調査区南壁・SD01北壁土層(1:80)

1425 有田遺跡群第256次調査 (ART-256)

所在地	福岡市早良区小田部二丁目55番5	調査面積	35.1m ²
調査原因	個人住宅	担当者	米倉秀紀・池田祐司
調査期間	2014.10.7 ~ 8	処置	調査後削平

調査に至る経緯

平成26年5月27日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があり（26-2-170）、同6月9日に確認調査を行ったところ、土坑、ピット等の遺構を確認した。協議の結果、申請面積138.49m²のうち、個人住宅建築部分51m²については、基礎工事の柱状改良が遺構に影響を与えるため、この範囲を対象として発掘調査を行うこととなった。それ以外の部分は現状保存とした。

調査の記録

申請地は有田遺跡群の東側に派生する丘陵の頂部西側に位置し、標高9.7mを測る。敷地東側は道路面と同レベルで、南側の道路は西へと下がる。

現地表面下60cmの鳥栖ローム上面で遺構を確認した。遺構面はわずかに西へ低くなる。検出した遺構は土坑1基、大型ピット2基、ピットである。

SK01 平面長方形の大型の土坑で幅140cm、長さ312cm、深さ50cmを測る。長辺を南北にとり、わずかに湾曲する。壁の立ち上がりは急である。南側100cmほどが10cmほど深く、不明瞭な落ちを成す。覆土は暗褐色から黒色の粘質土で黄褐色のロームブロック、粒が混じる。遺物はわずかで時期が決め難い。須恵器と土師器の小片が出土した。1は須恵器の高环の脚で内外縁に回転ナデ調整がみられる。2は須恵器の坏蓋で内外は回転ナデである。口径15cmを復元したが、小片で歪みがあり不確かである。3は土師器の甕で古墳前期と考えられる。他に刷毛目調整の厚手の土師器甕片、土師器高环脚基部片などが少量出土している。覆土と形態からは中世前半が想定されるが、出土遺物は積極的に古墳時代を下ると言えるものはみられない。

SK06 径80cmほどの略円形の土坑でSK01に切られる。覆土は暗褐色に黄色のローム粒を多く含む。深さ7cmと浅く削平が大きいと考えられる。北側は径40cmほどの円形の掘込みがあり、ピットの切り合いで、ピットが切るもとと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK07 径30cmほどの略円形の土坑でピットに切られる。深さ20cmほどで黒褐色、黄褐色土が互層となる。ピットの覆土は暗褐色の暗い色調である。いずれも遺物は出土している。

他に柱穴を検出したが、建物を確認するには至らなかった。ピットからの遺物はごく少量で、土師器の小片が出土しているが、薄手で古墳時代前期にみられるものに近い。また鉄滓1点出土しており、磁着しメタルが残る。表土からは鍋蓮弁文の青磁碗片が1点出土している。検出遺構・出土遺物から周辺に古墳時代、中世の集落が広がるものと考えられる。



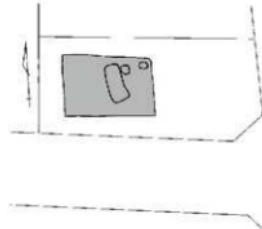
1. 調査区地点の位置 (82 原 309 1:8000)



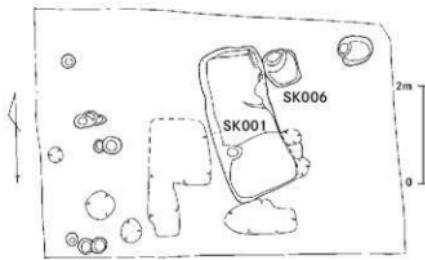
Ph.1 調査区全景（東から）



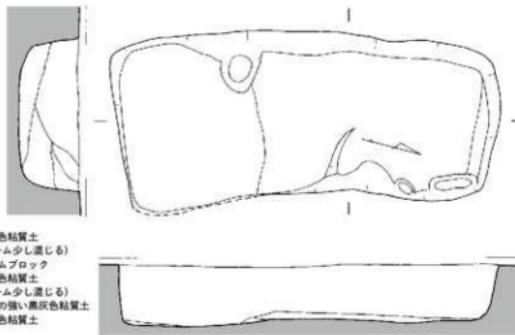
Ph.2 SK06, 07 検出時（北から）



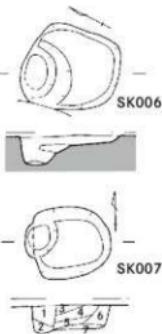
2. 調査区位置図 (1:400)



3. 遺構配置図 (1:100)



4. 遺構実測図 (1:40)



- 1 黒褐色土
- 2 墓灰褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黑灰色粘質土
- 5 黄褐色粘質土 (黒灰色混じる)
- 6 黑灰色土と黄褐色土の混土
- 7 黄褐色粘質土 (粘質強い)



5. 遺物実測図 (1:3)

1433 有田遺跡群第257次調査 (ART-257)

所在 地	福岡市早良区有田1丁目18番1	調査面積	73.1 m ²
調査原因	個人住宅	担当 者	池田祐司
調査期間	2014.12.3	処 置	調査後削平

調査に至る経緯

平成26年10月27日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があり(26-2-653)、同11月13日に確認調査を行ったところ、土坑、ピット等の遺構を確認した。協議の結果、申請面積242m²のうち、駐車場部分については切土工事が遺構に影響を与えるため、切土工事部分のみを対象として発掘調査を行うこととなった。それ以外の部分は現状保存とし、20cmほどの盛土の後に住宅が建設されている。

調査報告

調査地点は有田遺跡群南東部の北へ開く谷頭付近に位置する。現地表面は標高11mを測り、遺構面は30cmほど の擾乱土壤を除去した標高10.7mから10.55mの鳥栖ローム上面で、北へ下がる。検出した遺構は方形土坑1基、円形土坑2基、ピットである。

SK01 平面長方形の土坑で北側は削平を受け、下端から辛うじて規模を知ることができる。東西は240cmを測り、南北は195cm+が復元できる。深さは40cmほどで、平らな床面の一部には炭化物が広がる。覆土は暗褐色から暗茶褐色の粘質土で炭粒が混じる。遺物はわずかで白磁・土師皿の小片が出土した。時期は遺物から中世前半と推定される。1は白磁碗V類の口縁部、2は土師皿で器面が荒れており詳細不明である。3は須恵器の壺で、3条の沈線の下に波状文を施す。古墳時代の混じり込みである。他に土師器片3点、叩き目が残る須恵器小片1点が出土している。

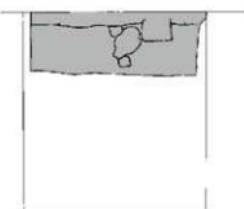
SK02 深さ25cmほどの土坑で北側、南東側を擾乱で削平される。平面形は幅110cmほどの長方形が想定され、暗褐色土を覆土とする。青磁片1、土師器片3、弥生土器と考えられる小片1が出土した。

SK03 方形の土坑で平面92cm×82cm、深さ12cmを測り、暗褐色土を覆土とする。土師皿を含む土師器小片が出土した。4は土師器の小片で土師皿と考えられる。器面が荒れている。

他に径30cmまでのピットを確認した。いずれも深さ20cmまでに収まる。遺構面は削平を受け、遺構の残りはよくない。検出した遺構は遺物から中世前期が想定されるが、それより下る可能性もある。出土遺物からは周辺に古墳、中世の集落の存在がうかがわれる。



1. 調査地点の位置 (82 原 309 1:8000)



2. 調査区位置図 (1:400)

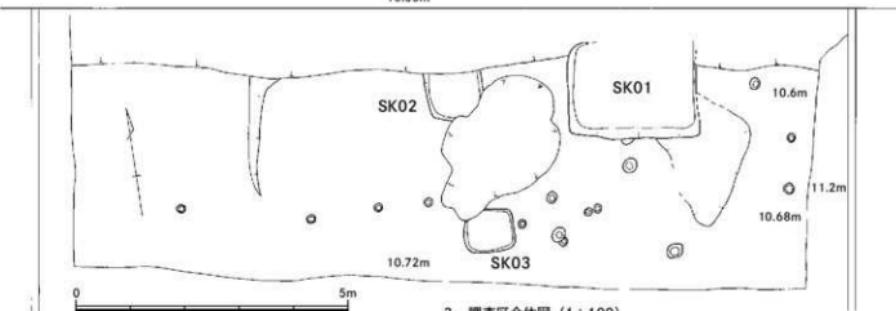


Ph.1 調査区全景（南東から）

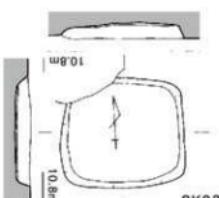
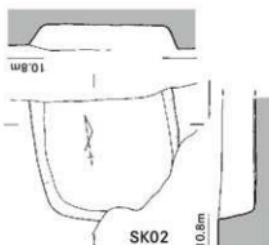


Ph.2 SK01（北東から）

10.55m



5. 遺物実測図 (1:3)



4. 遺構実測図 (1:40)

1437 飯氏遺跡第13次調査 (IIJ-13)

所在地 西区周船寺三丁目339番1

調査面積 41.87m²

調査原因 車庫造成

担当者 池田祐司・比嘉えりか

調査期間 H26.12.11 ~ 12.13

処置 記録保存

位置と環境

飯氏遺跡は高祖山から延びる丘陵裾及び扇状地に位置し、遺跡の西・北側は周船寺川に、東側は周船寺川の支流である谷郷川で囲まれる。今回の調査地は飯氏遺跡の北東端部、瑞梅寺川と谷郷川の合流地点に近い扇状地帯に位置する。既往の周辺では、本調査地の南側にあたる9次調査で弥生時代から中世にかけての遺構が密に検出されている。

本調査地は標高10m前後で、北面道路から100cmほど高い。今回の事業では土地の北側を道路まで切下げて車庫とし、戸建住宅3棟を建設する計画であったため試掘調査を実施したところ、GL-100cmで柱穴等が確認された。今回の車庫造成工事はGL-110cmまで掘り下げる予定であったため、その範囲（長さ約12.5m×幅約3.5m、約40m²）について発掘調査を実施した。

層位及び検出遺構（第2図）

1層は現代のガラを含む盛土、2~4層は水田耕作土である。遺構は5層の黄橙色シルト上で検出したが、5層直上には部分的に粗砂が見られた。

検出された遺構は、南北方向の溝1条（SD1）と多数のピットである。調査区の幅が狭く、掘立柱建物復元には至らなかった。

出土遺物（第3・4図）

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、中国産陶磁器、瓦器、石製品が出土した。

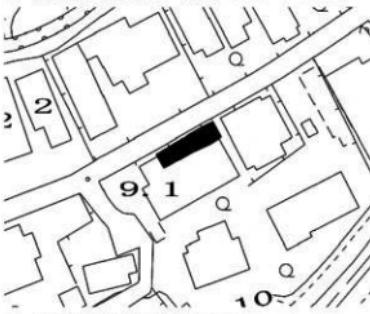
1は瓦器・掃鉢の口縁片。胎土は黄灰色で、外面は焼され黒色化する。2は青磁碗の底部片。3は青磁碗。釉薬は濃オリーブ灰色で、ビンホールや貫入が多い。4~6は弥生土器の口縁部片。いずれも中期前半。7は滑石製鏡。近世か。8は砂岩製砥石。

まとめ

中世後期の集落跡と考えられるが、溝の性格や建物の



1. 調査地点の位置 (120 周船寺 685 1 : 8000)



2. 調査地点の詳細位置 (1 : 1000)



写真1 土層断面 (調査区南面)

規模などは不明である。また、遺物量が少なく、時期の特定が難しい。ただし、南側の9次調査でも当該時期の溝が確認されており、関連性がうかがえる。今回は調査面積が狭く、建物の復元や集落の構造解明に繋がる材料が少ないが、度重なる建替えや出土遺物の少なさが、集落の様相を知る端緒となるだろう。

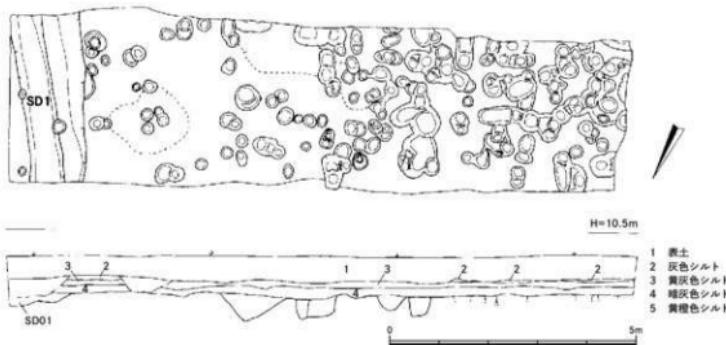


図3 遺構配置図 (1:100)

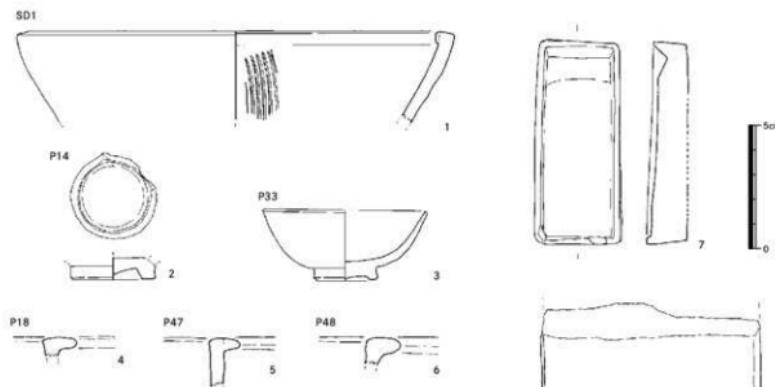


図4 出土遺物土器実測図 (1:3)



2. 調査区全景 (南西から)

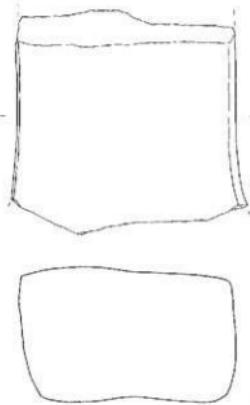


図5 出土石製品実測図 (1:2)

1440 井尻B遺跡第43次調査 (IGB-43)

所在地 南区井尻1丁目294番6・11

調査面積 51.84m²

調査原因 専用住宅建設

担当者 比嘉えりか

調査期間 2014.12.18

処置 記録保存（一部現状保存）

位置と環境

井尻B遺跡は福岡平野のほぼ中央部にあり、須玖丘陵が標高を下げながら北に延び、低平な台地となる境界付近に立地する。遺跡では旧石器時代以降の遺構・遺物が確認されており、古代寺院（井尻廃寺）の存在も推定されている。遺構検出面となる地山は鳥栖ロームである。

今回の調査地は、弥生時代の集落跡及び三宅庵寺の東院と推定される南北溝が確認された3次調査地のすぐ北隣であり、同様の遺構が確認されると予想された。今回の住宅建築に伴い事前に試掘調査を実施した結果、GL-20cmの鳥栖ローム上で柱穴が確認されたため、基礎工事によって埋蔵文化財が破壊される範囲について記録保存のための発掘調査を行った。

検出遺構

遺構面は表土直下のGL-20cmと非常に浅く、後世の削平や擾乱が著しい。遺構は、弥生時代中期の井戸1基のほか、弥生時代もしくは古代とみられる柱穴数基を確認した。その他、調査区にわずかしかからないが、竪穴住居跡とみられる遺構や土坑も確認されたが、時期は不明である。遺構の覆土はいずれも黒褐色である。

井戸SE1は、直径約1mの平面円形を呈し、弥生土器が多数出土した。深さは50cm以上あるが、今回の工事では破壊を免れるため、それ以上の掘削は行わず、現状で保存した。

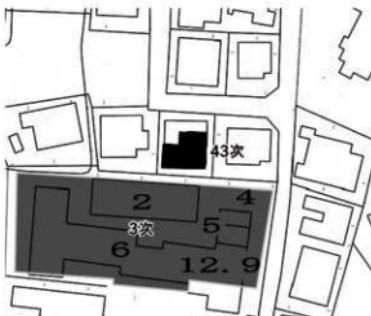
柱穴は1辺70～80cm前後の隅丸方形を呈すものが多數確認できる。古代に属すると推定するが、遺物量が非常に少ないと明確である。また、掘立柱建物の復元には至らなかった。

出土遺物

遺物は、井戸や柱穴から弥生土器が出土した。その他、黒曜石の剥片があるが、小片のため図化できなかった。



1. 調査地点の位置 (025 井尻 90 1 : 8000)



2. 調査地点の詳細位置 (1 : 1000)

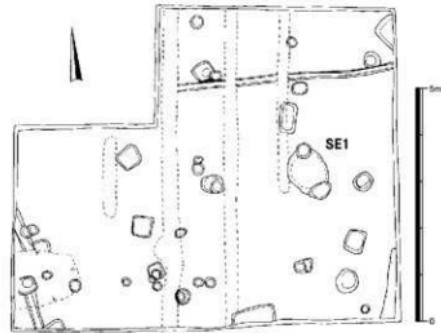


写真1 調査地全景（東から）

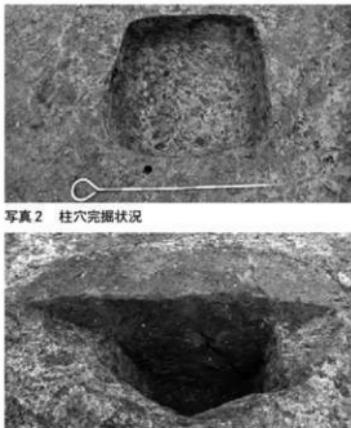
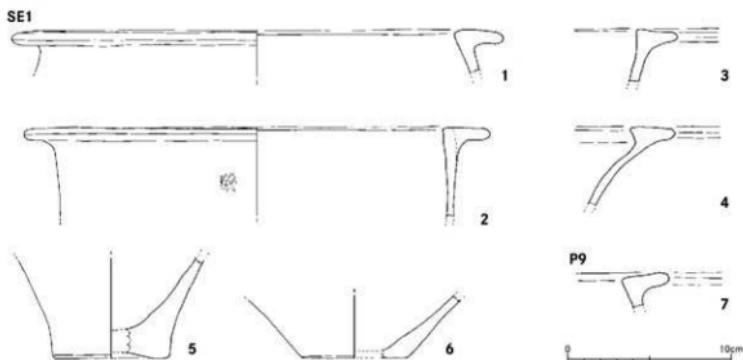
1～6は井戸SE1出土の弥生土器1の甕は復元内径24.0cm、2の甕は復元内径22.6cmを測り、外面は磨滅が著しいが縦方向の刷毛目が一部で確認できる。3・4広口甕の口縁部。5は甕、6は甕の底部。7はP9出土の弥生土器甕の口縁部。いずれも須玖I式新段階に該当する。

まとめ

弥生時代中期中頃及び古代の集落が確認された。3次調査でも弥生時代中期中頃の井戸が確認されており、同様の結果が得られた。古代については、遺構が不明確で遺物も少なく、瓦の出土もなかったため、井尻廃寺に関連する成果はなかった。削平が著しいものの、井戸などの深度のある遺構は良好に残っており、周辺での今後の調査成果が期待される。



3. 遺構配置図 (1:100)

写真2 柱穴完掘状況
写真3 井戸SE01半掘状況

4. 出土遺物土器実測図 (1:3)

1451 那珂遺跡群第155次調査 (NAK-155)

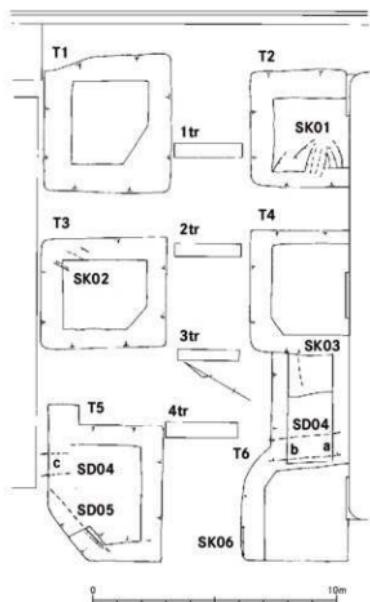
所在地 福岡市博多区東光寺町1丁目20番 調査面積 84m²
 調査原因 工場増築 担当者 池田祐司
 調査期間 2014.10.31, 11.1, 12.13・3 処置 立会後一部破壊

調査に至る経緯

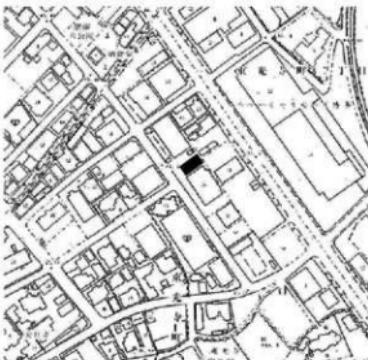
平成26年7月30日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった(26-2-371)。同10月8日既存建物の解体時に確認調査を行い4本のトレッソを入れ、3tで地表下-140cmの鳥栖ローム上面で土坑状の遺構を確認した。協議の結果、すでに既存建物の基礎工事の削平で大きな擾乱、削平がなされており遺構の残りも悪いと考えられるため、基礎工事の際に立会調査を行うこととなった。既存建物は昭和63年に建設され、今回は建物の北側一部を解体し、建替が行われる。建築面積は199m²である。

調査報告

申請地は那珂遺跡群北東側に位置する。工事では6箇所の基礎部分(図3 T1~6)をおよそ4m四方、深さGL-210cmまで掘削し、梁部分は基礎の間を幅3~4mほどを-80cmまで掘削した。基礎は前回の建物基礎の位置とほぼ一致するが、今回は掘削がより深く広いため、新たにローム層の掘削が生じた。建築範囲内ではGL-70~160cmで、西側の基礎工事がおよんでない部分では-50cmでローム層となる。



3. 調査区・遺構配置図 (1:200)



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 85 1:4000)

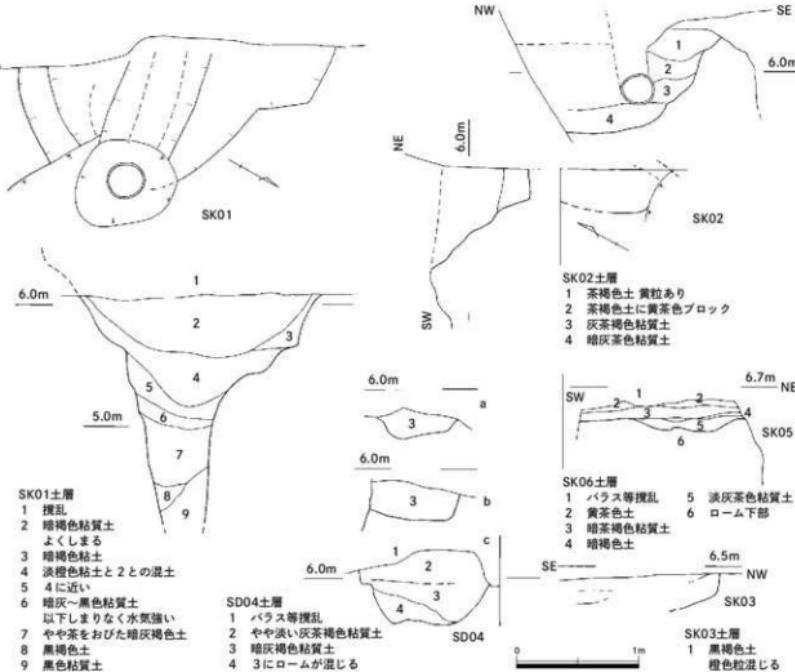


2. 調査区位置図 (1:400)

立会の結果、T 1以外の基礎部分で遺構を確認し、限られた時間で簡易な記録を行った。遺構の位置はおよそのものであり、高さは設計地表高（GL）を7.1mと設定し、比高差から得た不確かなものである。以下確認した遺構について記載する。

SK01 T 2 の西半で検出し、さらに西に広がる大型の遺構である。GL - 70から100cmまで削平を受け、東端は杭で擾乱を受ける。遺構上部の平面形は橢円形になると考えられ、南北2m、東西1.8mほどを確認した。T 4までは広がっていない。標高5.4m付近から下は急にすぼまり、幅60cmほどの東西方向の溝状を呈す。底まで掘削することができなかったが検出面からの深さ180cm以上におよぶ。覆土は上部が暗褐色、淡橙色の粘質土で遺物は少なく、下部は暗灰褐色、黒褐色の粘土で水気が多く、11層で須恵器、土師器がまとまって出土した。遺物から6世紀末の遺構と考えられる。上部からは糸切底の壺8が出土しており、混じり込み、または上部が別時期の遺構の可能性もある。

出土遺物 1から3は遺構下部の9層から出土した。1は須恵器の壺で1/4からの復元。内面に当具痕が残る。外面は白濁した自然釉がみられる。2は須恵器の壺で焼きが甘く灰白色を呈す。外面には疑似格子目叩き、上部は回転ナデ調整である。1/4弱からの復元。3は土師器の壺で調整は器面荒れで不明。一部赤茶色が残り地は淡桃色を呈す。4から11は上部からの出土である。4は須恵器壺蓋で焼きが甘く淡灰色を呈す。1/4からの復元径11.7cm。5は須恵器壺蓋片で器面灰色を呈す。6は須恵器壺の頸部で胴部外面に疑似格子目叩き、内面に當て具痕が残り、頸部は横ナデで内面に指おさえがみられる。7は土師器の壺で外面は器面

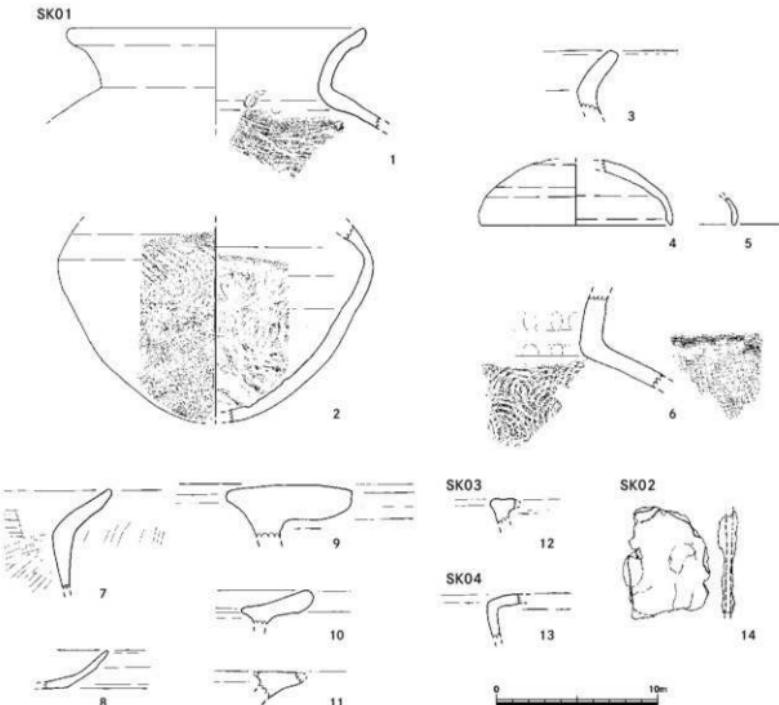


4. 遺構略測図 (1:40)

が荒れるが刷毛目がわずかに残り、内面は胴部を削る。8は底部に糸切り痕が残る壺で中世の遺物である。9から11は弥生土器で、9は須玖式甕棺、10は須玖式の甕、11は壺である。他に上部から須恵器の甕、土師器高环脚部などの破片が出土している。

SK02 T 3 の北側隅で確認した土坑で、断面とわずかな平面形を床近くで確認した。地表から100cmほどは全体に擾乱層で、東側、西側の壁面で深さ80cmほどの掘り込みが残る。床面の平面形は北方向にび、幅50cmほどの長方形または溝状になると考えられる。上端の平面形は南北に長軸をとる幅210cmほどの長方形または橢円形が想定される。遺構の覆土はロームの粒、小ブロックを含む茶褐色、灰茶褐色の粘質土で、下部には炭灰を含む。出土遺物は少なく、弥生土器片、鉄器1点が出土した。底近くから弥生時代中期の袋状口縁壺片が出土したが立会中に見失った。14は東側断面中位で出土した板状の鉄器片で、鋒が進み、X線写真で細かな亀裂を確認した。鋳造品と考えられる。弥生時代のものとは考えがたい。混じり込みか、遺構の時期が下がるのか不明である。

SK03 T 4 の東壁 - 70cmで深さ30cmほどの土坑状の断面を確認した。東へ広がる遺構上端を一部検出しが、ローム層の再堆積層が覆い平面形を把握できていない。覆土は橙色粒が混じる黒褐色粘質土でよく締



5. 遺物実測図 (1:3)

まる。遺物は城の越式の壺片12が出土したのみである。T 4と6の間の梁部分は掘削が-70cmまでで、T 4から南西約120cmから210cmにかけて途切れながらも黒褐色土の遺構埋土を確認した。SK03の続きとすれば大型の土坑となる。この遺構は今回の工事での掘削を免れている。

SD04 T 5、6の東側は一部-160cmまで掘削がおよび、その断面で連続すると考えられる溝の断面を確認した。溝は北西方向に復元できる。断面はT 5部分で-130cm、T 6部分で-100cm付近まで擾乱がおよび、確認できたのは溝の底20～40cmである。T 5北壁の断面では上端の幅100cm、底は幅50cm、標高5.6mほどである。覆土は暗灰褐色から灰褐色の粘質土で砂等の堆積はない。T 5と6北側の間は遺構が残ると考えられる。13は「く」の字に外湾する口縁部で遺物はT 6部分出土である。T 5部分では高環の环部と脚部と考えられる破片が出土している。

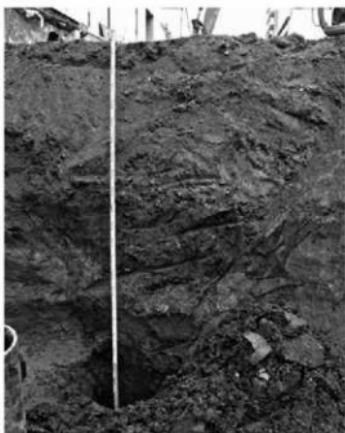
SK05 T 5で西側隅をかきめる南北方向に走る溝を-60cmで確認した。幅90cm、深さ40cmほどで、覆土は青灰色粘質土でロームの2次堆積層が間層として入る。覆土から近年の水田に伴うものではないかと考えるが、遺物の出土がなく不明確である。

SK06 T 5の北壁西側で遺構覆土の可能性がある厚さ25cmほどの堆積を断面で確認した。この付近は擾乱が-50cmと浅いために残った遺構である。灰茶褐色粘質土、ローム2次堆積を覆土とする。平面の広がりは不明で遺物も確認できていない。

まとめ

建築物基礎による削平で大きな擾乱を受けていたが、深い大型の遺構の一端を確認することができた。平面遺構の形状さえ把握できていないが、弥生時代と古墳時代の集落域と想定できる。周辺調査と合わせて、今回確認した遺構の位置付けを行う必要がある。

建物範囲で基礎、梁が及んでいない部分は、深い遺構は残っていると考えられる。南東側の既存建物部分も同様である。また基礎工事が及んでいない西側部分などでは-40cmから50cmでローム面に達し、より遺構が残っていると考えられる。今後も注意を要する地点であり、新たな工事が計画された場合は本調査を視野に入れる必要がある。



Ph.1 SK01土層（北東から）



Ph.2 SK02土層（南から）

VI 平成26年度福岡市新指定および新登録文化財

平成26年度の福岡市新指定および新登録文化財は、平成27年2月13日開催の福岡市文化財保護審議会において、10件の文化財について答申を得、平成27年3月26日の福岡市公報により告示された。

1. 指定文化財の概要

区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	古文書	鳥飼文書	47点	福岡市早良区 大字石釜	個人
有形文化財	古文書	明光寺文書	19点	福岡市早良区 大字石釜	宗教法人明光寺

(1) 鳥飼文書 47点 (有形文化財／古文書)

鳥飼文書は中世の背振山領横山（脇山）で活動した在地の小領主で、近世以降も引き続き早良郡石釜村に居住した鳥飼氏に相伝された古文書である。古文書は巻子一巻に仮装丁された中世文書が28点、同じく巻子一巻に仮装丁された近世近代文書が15点、その他の近代文書が4点の都合47点を数える。

石釜は室見川の上流、内野の小笠木川・椎原川と室見川本流との合流点から西向きに室見川を遡った山間に位置する集落である。東は小笠木付近から西は曲渕付近まで、北は内野周辺から南は椎原に至るまで、石釜を含む背振山麓の扇状地に古くから開発された村落と耕地は、背振山に所在した山岳寺院東門寺の膝下所領として、中世前期には「脇山院」、中世後期には「横山六十参町」などと総称された。この広域地名の呼称は、近世には「脇山郷」として引き継がれた。石釜の地名は長享3年（1489）正月22日の東門寺文書紛失状案に、嘉保3年（1096）に大蔵種房から背振山東門寺に寄進された横山（脇山）六十三丁のうちとしてみえ、16世紀中期までには惣郷としての横山郷を構成する一村として、石釜村が形成されていた。

鳥飼氏の出自は不明であるが、石釜村に本拠を置く在地の小領主として、16世紀には横山郷内にくぼ（窪）名・くぼの屋敷・廣瀬村緝屋名・廣瀬宮修理免田・中山村後田を、また横山郷の北に隣接する入部庄内にも二町の田地を知行した。また当該期に石釜の西隣曲渕を拠点とし、怡土郡の原田氏に属して早良郡南部に勢力を伸ばしたとされる国人領主曲渕氏とは主従関係を取り結んでいた。さらに鳥飼氏は村落の代表者・指導者として、当該期に横山郷全体にわたる地域共同体として成立していた「六十三丁御老中」・「寄合中」にも参加していたことが知られる。近世以降も鳥飼氏は農民身分に留まり、石釜村に基盤を持ち続けた。近世の鳥飼氏は一族五軒に分かれ、天明年間には毎年正月に菩提寺の浄土真宗明光寺へ参集し、年頭の式礼を行うのが恒例となっていた。また石釜村の氏神熊野神社の宮座行事も鳥飼氏の人々を中心として、戦後に至るまで長く行われていたが現在は簡略化されている。

古文書の内容は上記の鳥飼氏の経歴を反映し、中世文書においては知行安堵状や出舉米借券など、中世後期の地域社会における鳥飼氏の領地経営や経済活動に関連する文書を多数含む。また書状類の中には中世後期にこの地域に存在した地縁結合「六十三丁御老中」、「寄合中」に直接関係する文書が含まれ重要である。近世文

書も中世文書と同様に、主として田畠屋敷地の売得集積の証文等、鳥飼氏の経済活動に関わる文書が多く存在するほか、天明年間の加藤一純による「筑前国統風土記附録」編纂に向けた事前の廻国調査に際して差し出された文書が現存する。また近代文書は断片的ながらも、石釜の氏神熊野神社の宮座関係資料が存在する。

鳥飼文書は福岡市域の歴史、特に市の南郊、中世には脇山院や横山と呼ばれた背振山麓の村々の歴史的展開を考察する上で欠かせない重要な価値を持つ。中世文書の内容からは中世の脇山院全体を支配に置く領主背振山東門寺、背振山機構の構成員として村々の領主支配を担う各坊家、鳥飼氏の様に脇山院内の村々に拠点を置き、土地を集積して実質的な領地経営を行う在地の土豪地侍層、さらに現地で生業に従事する百姓層といった各社会階層の存在と活動が明らかとなる。また近世近代文書の内容からは江戸時代以降も石釜の地に根付き、地域の有力者として活動する鳥飼氏の姿を知ることができる。特に、既に本市の文化財に指定されている「青木文書」や「明法寺権文書」と同様に、中世後期の在地社会の様相を探ることが可能な貴重な古文書であると評価されるものであり、福岡市文化財に指定して保護を図る必要がある。

(2) 明光寺文書（有形文化財／古文書）

明光寺文書は福岡市早良区石釜に所在する浄土真宗寺院、石釜山明光寺に伝来する古文書である。その総数は巻子一巻に装丁された中世から近代文書13点、巻子一巻に装丁された近世文書1点、その他の近世近代文書5点の合計19点である。寺伝によれば明光寺の開基は鳥飼氏であるとされ、明光寺文書の内容も鳥飼文書と相互に関連する部分がある。

明光寺は中石釜の小原の集落を南東へ抜けた場所にある。「筑前国統風土記附録」によれば、曲瀬河内守の家来、鳥飼新左衛門という人物が出家剃髪し、万休と改名して寺を開いたといふ。鳥飼文書・明光寺文書から確認する限りでは、鳥飼万休は実在の人物で俗名を俊久といい、新兵衛尉・対馬守、出家後には対馬入道を称した。その活動所見は享禄年間（1528～32）から永禄年間（1558～70）に及ぶ。

明光寺文書の内、中世文書の多くは開山の鳥飼俊久（万休）の発受給に係る文書であり、それ自体が寺院の草創伝承を裏付けるものであるといえる。鳥飼文書と同様に国人領主曲渕氏と鳥飼氏との主従関係を示す史料が含まれるほか、鳥飼俊久が早良郡鳥飼村（現在の中央区及び城南区の鳥飼）から「浜銭」を徵収したことと示す請取状が残されていることからは、横山郷域のみならず早良郡の平野部にまで及ぶ鳥飼氏の領主的権益とそれに伴う経済活動が明らかとなる。また戦国期の博多綱場町の住人と鳥飼氏との関係を示す文書も存在する。近世文書の中には、江戸幕府の寺院統制に関する法令の写や17世紀末から18世紀初頭に浄土真宗本願寺派で行われた教義論争、いわゆる「三業惑乱」に際して当寺の明光寺住持が自身の対応を書き留めた古記録が残されている。

明光寺文書は、中世文書については鳥飼文書と同様に、中世後期における早良郡山間部の在地小領主の活動を具体的に示す内容を持ち重要である。鳥飼氏一族に伝された古文書として、鳥飼文書とは相互に内容を補う関係にある。また近世近代文書についても、江戸時代以降の明光寺の寺院運営に関する重要な資料として位置づけることができる。市域の歴史を考察する上で貴重な古文書であると評価されるものであり、本市の文化財に指定して保護を図る必要がある。

2 登録文化財の概要

登録区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	建造物	柴田家住宅主屋	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	柴田家住宅土蔵	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	柴田家住宅門及び塀	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	石橋義章家住宅主屋	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	石橋義章家住宅質蔵	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	石橋義章家住宅米蔵	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	石橋義章家住宅新蔵	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人
有形文化財	建造物	石橋義章家住宅納屋	1棟	福岡市早良区次郎丸	個人

(1) 柴田家住宅主屋 1棟 (有形文化財／建造物)

(2) 柴田家住宅土蔵 1棟 (有形文化財／建造物)

(3) 柴田家住宅門及び塀 1棟 (有形文化財／建造物)

早良区次郎丸は、福岡市西部の早良平野中央を南北に貫流する室見川の右岸に所在する。その地名は鎌倉～戦国時代に筑前国早良郡の名の名として現れ、二郎丸とも記される。石清水八幡宮に残る古文書には筥崎宮の領地とされ、正平21年（1366）の筥崎宮仮殿の遷宮や、文明10年（1474）の放生会に米を負担していたことが知られる。

江戸時代には福岡藩領の早良郡鳥飼触次郎丸となる。枝郷として高石村、立屋敷村があった。明治期の地図を見るとこれらの枝郷は本村の東に位置し、それぞれ現在の次郎丸一丁目19、同六丁目6付近にあたるとみられる。この内、立屋敷村は、『筑前国統風土記拾遺』に、村の南を通る道がかつて怡土郡に向かう官道で、村内に残る方形の区画が「駅館などの址」ではないかとの推論が記されている。また、同書ではこの地の特産品として椀籠、甜瓜が紹介されている。

明治22年、町村制の施行に伴い、次郎丸は早良郡田隈村の大字となる。その後、田隈村は昭和29年に福岡市に編入され、昭和47年の政令指定都市移行後は西区、昭和57年から早良区に属し現在に至る。

次郎丸には、唐津街道沿いの龜原村から分岐し、金武、飯場といった宿場や三瀬峠を経て佐賀城下に至る三瀬街道が通っている。この道は早良街道、脇山街道、原往還などとも呼ばれ、現在の県道558号線、国道263号線に相当すると考えられるが、道路整備の過程で道が付け替えられた部分もあり、完全には重ならない。街道の起源は明らかではないが、江戸時代後期には龜原から金武宿までの間の宿として、次郎丸に宿場が設けられたようである。明和8年（1771）の家数は8軒とされる。

次郎丸の宿場は現在、外環状道路と県道558号線が交わる次郎丸交差点から南に50mほどの地点から旧道が分岐し、弧を描くように南に延び、再び県道に合流する500mほどの区間にその面影を残す。道の両側には現在も白壁造りの建物が断続的に残り、往時の姿を偲ばせている。この地区は「次郎丸3丁目の白壁通り」として、平成15年、第17回の福岡市都市景観賞を受賞している。

柴田家住宅は宿場のほぼ中央に位置する。初代久五郎氏が天保期に次郎丸本村から移住した。安政6年に福岡藩が二代目勝平氏に宛てた書簡には「次郎丸庄屋、大庄屋格」とある。屋号を「岩井屋」と称し、慶応期に酒造業を始め、昭和10年に廃業した。

主屋は、三代目勝三郎氏が生まれた明治11年に、二代目勝平氏が建てたとされる。文久3年の家相図が残るが、前身建物の平面と見られる。建物は、店舗部と勝手部、座敷部等からなる。店舗部は桁行5.5間、梁間4間、土蔵造ツシ2階建、北面入母屋造、南面切妻造、東面庇付、棟瓦葺。座敷部は桁行2.5間、梁間3.5間、土蔵造平屋建、切妻造、棟瓦葺。店舗部の土間は間口7間の内5間を占め、勝手部も合わせると土間の面積は30坪を超える。土間は内井戸があり、豪快な小屋組を見せる。西と南の下屋部の土間は、昭和61年に床が張られて台所と食堂に改造された。ナカエの間は吹抜として神棚を祀り、吹抜に面した表と裏のツシ2階に高欄が付く。ミセの間、ナカエの間の背後に仏壇と座敷があり、柱や造作材すべてに墨や漆が塗られ、特に床、書院、床脇の座敷飾りは風格がある。

土蔵は桁行3間、梁間2間、土蔵造2階建、切妻造、棟瓦葺、北面。西側に1間幅の下屋が付く。北側妻面に入口を設ける。主屋と同時に設けられたとされ、明治11年頃の建築と考えられる。

門及び堀は棟門、切妻造、棟瓦葺、東面。差し肘木と腕木、疎垂木によって屋根を支える。出入り口は一枚板の両開き戸が付く。両側に木造の堀が付き、それぞれ主屋につながる。屋根は棟瓦葺、壁は上半が漆喰、下半は板張をしている。主屋と同時に設けられたとされ、明治11年頃の建築と考えられる。

次郎丸の宿場跡が残る地区は、これまでにも都市景観賞を受賞するなど、歴史的な景観が評価されてきた。の中でも柴田家住宅は、石橋義章家住宅とともに、昭和末期～平成初期の町家調査や、平成23年度実施の文化財悉皆調査において文化財としても高い評価を受けている。また、毎年、校区の小学校が、昔の生活を知るために見学に訪れるなど、地域のランドマークとしても重要な役割を担っている建物でもある。明治11年建築の主屋は、生活様式の変化に伴い、奥の水回りを中心に改造された部分もあるが、それ以外の部分は、特に旧街道に面した表側を中心に、門及び堀も含め当初の姿を良好に保っている。これら建物群は、福岡近郊における近代の宿場、農村の景観を今に伝えるものとして、文化財として登録することにより一層重要性が認識され、長く保存活用されることが望まれる。

- (4) 石橋義章家住宅主屋 1棟 (有形文化財／建造物)
- (5) 石橋義章家住宅質蔵 1棟 (有形文化財／建造物)
- (6) 石橋義章家住宅米蔵 1棟 (有形文化財／建造物)
- (7) 石橋義章家住宅新蔵 1棟 (有形文化財／建造物)
- (8) 石橋義章家住宅納屋 1棟 (有形文化財／建造物)

石橋義章家住宅が所在する次郎丸の歴史的環境は柴田家住宅と同様である。

主屋は三代七郎氏が明治14年に建て、大工棟梁は姪浜の金山甚七、清之とされる。建物は店舗部、勝手部と座敷部からなり、奥に憩居部屋がある。店舗部は桁行4間、梁間5.5間、土蔵造ツシ2階建、切妻造、桟瓦葺、東面庇付。通り庭に平行して、オモテの間、ナカエの間、居間の3室が並び、ナカエの間と土間の中央を吹抜けとする。土間は小屋組を現したハリミセと呼び、表と裏のツシ2階を繋ぐ太鼓橋（昭和61年作り替え）を差鶴居に掛け渡す。土間の端に荒神龕や大釜が残る。ナカエの間には仏間境の差鶴居の上部に御神倉（オコグラ）と呼ぶ神棚を祀り、脇の天井を一部抜いて、天窓からの光により手元を明るくする。オモテの間の箱階段は炬折れさせて半畳のスペースに納め、最下段の踏板を畠上に引き出せるよう工夫されている。座敷部は桁行2間、梁間3.5間、土蔵造平屋建、切妻造、桟瓦葺、東面及び南面庇付。オモテの間とナカエの間の背後に、座敷と仏間があり、柱から造作材すべてに墨を塗る。

質蔵は桁行3間、梁間2間、土蔵造2階建、切妻造、桟瓦葺、西面。建築年代は不詳であるが、後に述べる新蔵以前に建ったとされることから、明治期の建築と考えられる。妻側中央に引き戸を設け入口とする。道路に面した側に錦絵を施しているが、これは近年の改修時に加えられたものである。

米蔵は桁行3間、梁間2間、土蔵造一部2階建、切妻造、桟瓦葺、東面。建築年代は不詳であるが、後に述べる新蔵以前に建ったとされることから、明治期の建築と考えられる。妻面右側に引き戸の入口を設ける。内装や扉などは、近年の改修により改変されている。戦時中は県警の書類を疎開のため保管していたとのことである。

新蔵は桁行3間、梁間2間、土蔵造2階建、切妻造、桟瓦葺、南面。大正3年の建築とされる。平側面右側に入口をつける。平成21年に大規模な改修が行われ、扉が引き戸から開き戸に変わり扉内側に錦絵が施されている。

納屋は桁行5.5間、梁間3.5間、木造一部2階建、切妻造、桟瓦葺、東面。建築年代は不詳だが、家人によれば主屋と大きく変わらない時期とのことで、明治期の建築と考えられる。かつては牛小屋として使われていたが、現在は作業小屋、物置となっている。東面を吹き放ちとし、軒は礎石敷きの丸太で支えている。小屋裏の架構は牛梁等を用いた和小屋組構造とする。

次郎丸の宿場跡が残る地区は、これまでにも都市景観賞を受賞するなど、歴史的な景観が評価してきた。その中でも石橋義章家住宅は、柴田家住宅とともに、昭和末期～平成初期の町家調査や、平成23年度実施の文化財悉皆調査において文化財としても高い評価を受けている。また、毎年、校区の小学校が、昔の生活を知るために見学に訪れるなど、地域のランドマークとしても重要な役割を担っている建物でもある。明治14年建築の主屋は、生活様式の変化に伴い、奥の水回りを中心に改造された部分もあるが、それ以外の部分は、荒神龕や箱階段など、外観、内部ともに当初の姿を良好に保っている。土蔵群も良好に維持管理されている。福岡における近代の宿場、農村の景観を今に伝える建物群として、敷地内の納屋と合わせ、文化財として登録することにより一層重要性が認識され、長く保存活用されることが望まれる。



写真①

鳥飼文書

長禄4年（1460）3月27日

積善坊英隼屋敷安堵状

(25.1cm×36.7cm)



写真②

明光寺文書

天文16年（1547）3月5日

曲測氏助名字状

(24.8cm×33.3cm)



写真③

栗田家住宅主屋



写真④

石橋義章家住宅主屋

報告書抄録

ふ 書 巻 シ 編 編 所 發 行 年 月 日	り が な 名 次 名 番 号 著 者 集 機 在 地 29	ふ り が な 福岡市埋蔵文化財年報 平成26(2014)年度版
いじりびーのせき 井尻B遺跡(第41次)	みをみくいじ0 南区井尻五丁目331番3地内	40134 90 33-33-07 130-26-23 2014.4.14~ 2014.6.18
ありたいせきぐん 有田遺跡群(第254次)	みなみくごじかわ 南区五十川1丁目13番1号	40137 309 33-34-10 130-19-60 2014.5.14~ 2014.5.29
もろおかびーせき 諸岡B遺跡(第24次)	みなみくごじかわ 南区五十川1丁目13番1号	40132 93 33-33-42 130-26-57 2014.7.14~ 2014.8.1
おおはしこいせき 大橋E遺跡(第12次)	みなみくごじかわ 南区五十川1丁目13番1号	40134 2382 33-33-12 130-25-32 2014.4.14~ 2014.6.18
ありたいせきぐん 有田遺跡群(第256次)	みなみくごじかわ 南区五十川1丁目13番1号	40137 309 33-20-13 130-34-00 2014.10.7~ 2014.10.8
ありたいせきぐん 有田遺跡群(第257次)	みなみくごじかわ 南区五十川1丁目13番1号	40137 309 33-33-52 130-20-10 2014.12.3
いのいせき 飯氏遺跡(第13次)	みなみくやなが 南区弥永五丁目4番1	40135 685 33-34-21 130-14-58 2014.12.11~ 2014.12.13
いじりびーのせき 井尻B遺跡(第43次)	さわらくありました 早良区有田1丁目13-4	40134 90 33-33-14 130-26-32 2014.12.18
なかいせきぐん 那珂遺跡群(第155次)	みなみくわしわら 南区柏原1丁目1306-1・2、1307	40132 85 33-34-36 130-26-06 2014.10.31/ 11.1.12.13

所 取 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
井尻B遺跡(第41次)	集落跡	中世	掘立柱建物+溝+土壙+溝+柱穴	土師器+陶磁器	
有田遺跡群(第254次)	集落跡	古墳	竪穴住居跡+土坑+柱穴	土師器	
諸岡B遺跡(第24次)	城館跡	中世	溝+地下式土壙		
大橋E遺跡(第12次)	集落跡	古代/中世	溝+土坑+柱穴	土師器+須恵器	
有田遺跡群(第256次)	集落跡	古墳/中世	土坑+柱穴	土師器+須恵器	
有田遺跡群(第257次)	集落跡	古墳/中世	土坑+柱穴	土師器+須恵器	
飯氏遺跡(第13次)	集落跡	中世	溝+柱穴	陶磁器+石製品	
井尻B遺跡(第43次)	集落跡	弥生	井戸+柱穴	弥生土器	
那珂遺跡群(第155次)	集落跡	弥生/古墳	溝+土坑	弥生土器+須恵器	

**福岡市埋蔵文化財年報
Vol.29
— 平成26(2014)年度版 —**

発行日 平成27年12月25日
 編集・発行 福岡市教育委員会
 埋蔵文化財第1課
 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1
 印刷 協文社印刷株式会社
 〒819-0001 福岡市西区小戸4丁目24番5号

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 29



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
DECEMBER 2015
JAPAN